湖月抄

[illegible]

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

若紫　源氏十七歳の三月より冬までの事見えたり。以歌為巻ノ名ト也

手につみていつしかも見ん紫の根にかよひける野辺の若草。此哥によりて若紫と侍り。紫とかける詞ハみえ、次

孟　毛詩正義ニ名篇之例不過五其内偏挙一則或上或下云々。此巻ハ桐壺或下によるべし　花　式部卿の姫君を紫の上と名づけたるは藤壺の女御のゆかりなれバ紫といへるなり。されバ此巻は秋の夕べハましてこゝろのいとまなく思し乱るゝ人の御あたりに心をかけてあながちなるゆかりも尋ねまほしき心もまさり給ふなるべしとあり　師　此紫上の事を此巻にかくと見えて乗せたり

わらハやミ　細　俗にいふおこり

やミし　河　瘧病ワラハヤミ　瘧

まじなひハまじなふ也。厭術

呪三之十七　孟　まじなひハ加持ハ

也。真言のことなり。加持ハ真言教陀羅尼の事なり。

細　花鳥　杜子美が詩ニ手ニ提ク髑髏血と云句を誦しても

是杜子美花卿ノ歌ニ云子璋髑髏血模糊手提擲還崔大夫ニとある也

なにがし寺　細　鞍馬寺といふ説あり　河　北山と云ふ引雲林のあと雲のかゝるまゝく月もわかれて　万　此寺鞍馬寺と云。昔四十九院ありて仏法盛地也と云々。河原院とよみしの院と同様云六帖のうたに法やうの山路のつゞらをりかな。まして…　此寺にて…

わらハやみにわづらひ給ひてよろづにまじなひかぢなどまゐらせ給へどしるし（験也）なくてあまたたびおこり給ひければある人北山（河　向南山　万）になんなにがし寺といふ所にかしこきおこなひ人（行人也）侍る。こぞの夏も世におこりて人々まじなひわづらひしをやがてとゞむるたぐひあまた侍りき。しゝこらかしつる時はうたて侍るを（わらハやみとも）とくこそこゝろみさせ給ハめ（早く聖をとうけてみさせよとなり）など聞ゆれバめしにつかはしたるに（源の聖をめしにつかへしめて）おいかゞまりてむろのとにもまかでずと申したれバ（源詞也）いかゞハせんいとしのびてものせんとのたまひて御ともにむつましき四五人（惟光良清なども）バかりしてまだ暁（小山の事也）におはす

てうちしぞ云傳わり辨事也そくの海のつらわうりと清少納言枕草子にもしるせり 孟 鞍馬寺
の事 旧記ニ云 治部大輔従四位下藤原伊勢人 巨勢丸子武智丸孫 桓武天皇御宇造東寺行事間所騎
用馬於鴨川原放失尋行登此山奉拝毘沙門天始建此寺云々 水鏡ニ云 延暦十六年 藤原伊勢人と
云人貴布祢明神のをしへにてつくりなしせ 師 抄元亨釋書にみえたし
世にをこりて 孟 時気とて司天在泉の運気に依て様々の病をやむるなり
人々まじなひわづらひしを 師説 世の呪師などのまじなひの事也 聖も甚ましなひ加持しなど
しゝこらかしつる時は 細孟 の説ハ如形とまうすとある也
老かゞまりて 孟河 老屈 白氏文集 老屈
むろのとにもまかでず 孟 室外也 といふりて禁足なる人也
召天台座主慈恵僧正奏老病無術之由不参 并三之後 随召参入奉加持 卽減 御云々 花園
融院瘧病とつゝみて世のふ附天台座主良源僧正をめされしは天元四年の秋の事也 孟河 圓融院悩瘧疾御時
と小野宮記にしるせり。人々良源僧正称應化佛 此時被聴輦車 爲執杖阿闍梨二人
其後更被任大僧正云々 云
山乃桜ハまださかり 孟 盛
四の花ハちりて三吉野の山の
桜ハまださかり 赤人 里ハあれ
鞍馬そのほかの山の桜
ハまさ盛也 祈 細 引歌よ
ハ不可及 ... 花ハ
のゝ花ちりもそ ... ふかう
所なりとそ 細 河海云

いる所なりけり。三月のつごもりなれば京の
花ざかりはみなすぎにけり。山のさくらはまださ
かりにていりもておはするまゝに霞のた
ゝずまひもおかしうみゆればかゝるあり
さまもならひ給はず所せき御身にて
めづらしうおぼされけり。寺のさまも

まらくしらく侍気をせ...
そはわりきたて...
ちくハうすきさ侍るなり
ちの事も 鞍馬寺之名を
じれ気をとゞめるの
う侍りとし
あるき是のるる 孟いふ
らん巖の中にも侍べらん
世のさまのうてこそ
らん 河 佛弟子須菩提住
西天石窟 取要書之 寒山
詩云 余家有一窟 々中無
一物
いとゞさらやつれたまへれと
此代をくろさへ又病者也さ
侍るべきれ
ひとひめし侍しにや
まへさまめしよつらひされ
どしわり
ぜんげこの 細 年老てハ現
世の祈祷などハ事とも也れ
後世のつとめをすて事と
いまへきさるすとし 明 修験者
といふし

いとあはれなり。峰たかくふかきいはの
なかにぞひじりいりゐたりける。のぼり
給て。たれともしらせ給はずいといたう
やつれ給へれど。しるき御さまなれば。あなか
しこや。一日めしはべりしにやおはしますらん
いまはこの世のことを思ひ給へねば
げんがたのおこなひもすてわすれて侍るを
いかでかうおはしましつらんとおどろ
きさはぎ。うちゑみつゝ見たてまつる
いとたふときだいとこなりけり。さるべき
ものつくりてすかせたてまつり加持などまゐる
ほど日たかくさしあがりぬ。

けるべきわりてもうせんそてまつる 細 将軍かなる人し河内守よたてまつらんとする
孟 もんぜ八食に叱の栄とをうきてうごけしずん世俗よ飲入るとをさいのすくきるく
うちかりしまいうかしくし目しうく まづ曉よおいきとぬうよ何のころら待るらも加持かとハ
備の三密なり指と八行者の三業なり彼三密と此三業よ相応すと加持といふ
うじげにくらりけり 孟 盤折
通二巖巓一 白氏文集 巇陝
或 九折 花草まよらくて至
ここ地らく海のつらけり
なかしこ宗なれど
細 俳諧の法乃もうてひの義
さ海く影の中までき見
アそやきくとも見すくも
こんすかる
なるし 備折
孟 芭蕉翁号泊山俳謝
見深花物語
かすりや川しをうけて
いもしそそれ
細 源氏の為ひく源の流う
る経よおかりに御本尊
凡よ也を俳諧の中をとむる
見て修行の詞く 師や

さわうしのんどうきこ雨あらくうしこ僧坊 聖代僧坊し 平九院なりし之
どもあらはよを掛つきうし ふで伏つぐられ 源詞 歎きの七まうりとて
なるとし つもの志りよやかでして いさすれどもうこくし 小宗猶し
うきわうしてをまどなうやらうおしし給ぐ 細 屋廊之
そそごくにしりのあわいおよ人のとむよ 木立
ことそひのんへいそしとをみるらんいそれなんたまぬ
じ僧都のこせいてをせこりりの坊よえ 細三年禁足の中まで
べ家ならこころしもくもを山ぞ尻 源氏と俳諧源のなりける
まそあらすれおやしうもあそうや川し 孟句
くれなくしもしそとれもぞのまふぐさけおかる 孟句 細 女わらくそ 尼公のか

つくろとハ此俳名がるたらく
すくうあくしこき海をとの
まふなり
きそもしそきそれ
此 源氏の毛よおいきとはこで
とくと俳諧のさうやせんよ
こおなり
君ハをとこるい 師 庵の祈
読るらハし 細 看経をを
しまうて こし
とうり来まざつうさせまて
俳人の詞之 細 とうりハくり
中ざるし中あれハとをとう
ぬるすのわるらし
うしろの山よしろうくそく
孟 異本よ元うへの山よとあり
俳所谷といふ所あり 源 門前ハ
秋末 後ハ秋山 終日蕭々 晩
望閑之 紀納言長谷雄

はるべし わくうハれじあするとて出さてそてまつらるも 関伽 佛よまつるる水
ゆりなじすりうもすくうつよこ程りしこうよとき 細 佛法の人の云く
まうそてあらせれ。僧都ハよもさやうよハもたへ給
ハじといかなる人すらんとうちくいふおり
てのぞくもあり。おうしせあうの女ごどうをいわ 伝乃尺をきうるべし
きんよるるべなんと見うとのふ宗ハいとこる
し給ひて日たくるまでれいうすんと中ず 源之
しうるをそううまざつるハさせのそし 拾句
いれねうんょうく修うとろさこゆ往来べくしろの 細 源の云々
山よしろ出るく宗のくさとこのふそうるよこす 庵をまづなんさうよ極山し給く
そわくりて四方の梢そこくしたうらく ほと 二良
わされうほど。急よいそうくもふそうら 結 細 源氏

人のくに　細 他國也 伊勢物語
語る人のおもてもおかしかるへ
るんやまぶかりろとふよ
おかし 河 美の國の事は
あらう也
御絵いみじう　絵かく人
なんありけむ 細 御心と
思ひなくまさらせ給ふ 盃
とのたまふしのなり
なにがしの嶽 細 あさ間の
だけと云し花の義也
花 なにがしのたけ 無下く
なきさむべしとも別し
てあさまのだけといふ
をめやの儀ると又しし
云故也 師 なにがしとあるは
しる詞なりと云

所にすむ人心に思ひのこすことはあらしかし
とのたまへば これはいとあさく侍　細 さつけ人の詞
り 人のくになどに侍る海山のありさまなどを
御らんぜさせて侍らば いかに御絵いみじう
まさらせ給はん 絵詞よくかき給ふとも　ふじの山 富士 なにがしのた
けなど かたりきこゆるもあり 又西 嶽
国のおもしろきうら〳〵 いそのうへを
いひつゞくるもありて よろづにまぎらはし
きこゆ 良清詞也 ちかき所には はりまのあかしの浦
こそ猶ことに侍れ 極也 河 曲 阿隈 なにのいたりふかき
くまはなけれど たゞ海のおもてを見わた
したるほどなん あやしくことところににず ゆほび 細 悦

まうして源氏に
まうらせて良清が物語
ちかき所には良清が中のおもしろき所
かはりて其の名所をかく云たる
へき張本なり
ゆほびかなる 河 寛 ひろき心也
濁てよむ 或云 ゆたかにと儀也
きぶら 細 初てお家したる人
を云 河 新發ハ入釋門ニ入也
初發心の義也 經ニ新發意
菩薩と云 花 御堂
関白出家して入道殿と
申されしより出家の
人を入道と云ことをへだてゝ
御回向をば新發意
と申の也
いとつゝし 細 とつよき
云狩りまつりとひとつ様
新るまいる内へ片腹痛不
どなりとつゞき 畢 事なき
るまいひおくなるべし
大臣の後 細 明石入道の
すゑ大臣の後胤にて按察使
是をさとしてへからへ 師 の云
いま孫と云んとすらん 河 出身

花 是よりは義人ちまふ良清が物語之 良清ハ播磨守が子なり 師 これ源氏の御めになくとらく
みよりの人ゆかりのまわくぬ也 ひのかみの人なりく 暁 ひのかみ一族
かなる所に侍る かのくにのさきのかみ しほちの
むすめかしづきたる家 いといたしかし 大臣
ののちにて いでたちもすべかりける人の 世のひ
がものにて まじらひもせず このゑの中将を
すてゝ 申給はれるつかさなれど かのくにの
人にもすこしあなづられて なにのめいぼくに
てか又宮こにもかへらんといひて かしらもおろ
し侍りにけるを すこしおくまりたる山ずみも
せで さる海づらに出ゐたる ひがひがしきやう

也身をとし立出仕をもまたくりなるく 細 中ねそむかく世をきらへり 師 世のひがものとハひがめる心のありてこそ心得べし
近衛の中将をとりて 是ハ一心にかなひ大臣家の子なれバ中将をもへつらひて国司を望みしハ世のひがものとかや
とハ其ことをしてくまのよろしからぬ顕基の中納言のことくなるへし
あまた有 河海実方朝臣の例を引けり 又山蔭の中納言中将と辞して倫寧に任じて
要よりかしハ三代実録よりみえたり 河 藤原實方朝臣長徳三年正月十三日辞左中将任陸
奥守 即日還昇 此外例可勘

やうなれどげにかのくにのうちにさも人の
こもりゐぬべき所〃はありながらふかきさ 里
とは人ばなれ心すごくわかきめこのおもひ
わびぬべきによりかつは心をやれるすまひにな
む侍るさいつころまかりくだりて侍し
ついでにありさま見給へによりて侍しかば京
にてこそ所えぬやうなりけれそこらはるか
にいかめしうしめてつくれるさまさはいへど
くにのつかさにてしをきける事なれば

かくさきとハ 細 深山などハ妻
子をもとし住がたき故に此海づ
らにおもしろくすめる也
なとやまり 山みもあまたあり
里らくして妻子わびぬより
さやうに心をやる也 細 都ハ
さいつころ ぬすりもなりて
師 さんぬるころ
う文脩磨にありしなり
明 近曽也 孟 此何比 良清
京にてこそ所えぬ 細 京にて
ハ世のすまひもあまりにけしかり
さばかりに此のおもしろきすまひ
てかくしく仕へさせり
師 京にてこそ人数ならで居けれ
とぬぐひときやうなれども 公
しいへをも自由になれハ

う作りおとくしく 孟 津よくなしぬとあり 此つかさは初めて受領のよしにて かくのごとくに遊ぶハ
称之なり
さいへど 細 国のつかさなりしゆゑに心まゝにかまへたる也 かれも此つかさのしゆゑとぞ
かまへつまん余念のあるべしとなり
おくれたりきまり 妻あおやかにいひつゝ
思ひかけぬもよくなるひとのまの法あるよ
てまつりしゆゑとて
まそそくひとめいしと 孟のちは
のちのつかさのとりそく人をと
源の好色の心をうつしておもへ
向まふたり
よしうハあらずなんとよくうそかせ
あなどりなりけり 良清がさもん
だせるのをもあやしくうしなふ代
しうしん人なりとぞ
孟河 操 三月廿日 心操 風操
昔同心也 吉いへるめよき物まで
いまいつまで日ハうつろ心でせ
とかく人よろしくて
作くの思ひなりき 細 後のゆかりの
のさいハ一仙四十年ふくたハ
あまりくらくにくハりくさ
やうの侍りもしく人の

のこりのよはひゆたかにふべき心がまへもふたなく
したりけり後の世のつとめもいとよくして 河 私三
なか〃法師まさりしたる人になむ侍り
けると申せばさてそのむすめはと問給ふ
細 源の問給へる
けしうはあらずかたち心ばせなど侍るなり代〃
細 良清の詞
国のつかさなどよういことにしてさる心ばへ
見すなれどさらにうけひかずわが身のかく 用 之 財
いたづらにしづめるだにあるをこの人 孟 人の女 明 云上ま
無 忍ごとなく
ひとりにこそあれおもふさまことなりもし我
よ妻子ともなく
におくれてそのこゝろざしとげずこの思ひ

んどうのとりのあるじどうけひろぬとく
わざわざくいてづてふしづめりぶふわうと
いむすめハある位の人にもあらんと思ふべく
この人ひとりにこそあれ
思ふさまことなり
そのこゝろざしとげずて
ひろうわう　細 只海へ入ね
ともよりての名合せて
吉祥天女の弟翁をひろう
うや花るの役まハ乃のべうく
ざう兄 花青大香王といふ金
こゝろざしむすめをかりしと
此國の王四人ともに此女を
ちぎりしけるに此女いせたる
父母無承といふぬいのりを
水七万八千九百里とる也
竜宮城ありしを龍王これ
とれて大海の底にとゞ
るをとらて父の王并よ
此國の四王在てお向てね
ぬしうるかあり。吉祥天
女の弟にありし作り。又娑
伽羅竜王の八番のむすめ
の母も王の妻あるれハ后といふんとりあるならむや

入道が受領の身にあまれるくらゐにあるべしとせめて
もとよりハ此わかん上一人あれハこの人とだにふかくつらにあることし給
細 此入道 我のつぎわれよりて國母ともなみなそでハしとおもひて
る位よあさんの志とげどもし縁ハもつけどハらく
宿世縁のるべく　身をもおけくいひそくにて

おもひおきつるすくせたがはゞうみにいりねとつ
遺言
ねにゆいごんしおきて侍るなるときこゆれば君
海龍　王
もおかしときゝ給ふ。人々かいりうわうのき
入道の詞
さきになるべきいつきむすめなゝり。心たか
さくるしやとてわらふ。かくいふははりまのかみの
細 良清也
子のくら人よりことしかうぶりえたる
從五位下になりたる也
なりけり。いとすきたるものなれば、かの入道の
小侍の人の詞也 良清好色の者なれば
ゆいごんやぶりつべき心はあらんかし。さて
細 此良清ハ入道の遺言をやぶるべきと也
たゝずみよるならんといひあへり。いでさ
孟 又一人の詞
いふとも

蔵人ハ六位なり。巡爵とて從五位下に叙せらるゝ也　細 今年の除目に叙爵せしなり　花 正月五日の叙位に
入道が此ぶんのよき位の人にせんとおもへるを
良清が此ちぎりをかなへんとおもふべく
帯よろづりて作りつゝいそであらう海をまんまよりて
作りしとあしとうにおとろく。此心より立のこる
のぞやさいふとも　細 又ここよりおかの侍の人ゞ云へいふ
此入道のおふびとりぐあて云ぶり
陪人のいふべし　読切へし
はゝこそゆへあるべけれ
細 良清が詞也 母の族姓を云
この松風の巻にも此族姓のこと
みえたり。明石ハ系図に入ぬと
をしるし。但松風巻に大井
の左には明石の君のこと
たれども女は唯して可キ
心得也
よきわかうどはら
河 若人 童也　細 此母の説
よりめでたき人などを呼び
して仮にも此地へもて来るなど
細 とてき

ゐなかびたらん。おさなくよりさる所にお
ひいでゝふるめいたるおやにのみしたがひ
母の詞
たらんは。はゝこそゆへあるべけれ。よきわかう
ど、わらはなど都のやんごとなき所〳〵より
縁にふれて
るいにふれてたづねとりて、まばゆく
こそもてなすなれ。なさけなき人になりて
ゆかば、さて心やすくてしもえおきたらじを

ともかくも云のがれなれども
ゆくよ情ある人あらの
此雲のあるよ物かく入たる心を
云てとも云やぶりて逢へ
とる人もあるべらしく
孟 何済く思ひのるを云
人素寂ハよの字を此く
る見とふり[illegible]不足説用 孟
そこのうかめし 細 幸う離
用く 花 あまの住居の見
るめもしろくし 秘よ出
よろうりめぐそてつむ 河海
あるくえスうりしもかならる
つるきのそこのころかも 紅
架ちりやと 後撰
身そひかくそう 細 源ハちと
世のつるのうくよいちびひさるれ
んうされハ女よハ心をとまる
べきしんて振るとせやらん
それくりあれと 細 今日ハ
ゑとりの汲物よ[illegible]
て癉もとうてせうなく
阿まのうかあて 細 [illegible]
けふ[illegible]

じやうじつとありけるにあらで
海のそこまでかうしふひいりしんぞこれなき
めでたひつしうかぢの絵てしづかにおとなしくず
せりしうりやうかくもかすべてうつくし
りそひかくしうこじぬとのふりこゑそれ
汲みとじまうしんやとこうてめうられ
うりぬれどとこしせうちぐすわたりめう
よてそいあれたやうてせ給ふんしあう
どぢとこれはのけるすうちられまさ
海よゆうしまうどこうひハ人ものう
よりちどまうていでさせの人どもを
さしめあくされ人やもそうみまうう

あるそうして 物よその領佐
あらまほしや
夕されのいそのうかさ
細 前よ結ひしありなされ
八人国を思ひ給て夕暮の
ゑもそこうるよ立帯済よ
用意ある様し
あのうしハうき此りと
ゆあしくくそうとあれ
とくういうう志さくし
てとあり借別のさころ
おもり
人くいうへしまう
聖の語へもしありく京
まえへしまあうりハあ
らん

鬢ねもあらしひ給ハねだしさむすがよかりしく
てぶらハ暁よりの御ふ日もいとあはうさに
つまでくおまれバ夕暮のいろうらとそとうらま
まどれくぶのこしげなされりよ立出のふ
人くいりへしおそこれと川ちうりほうを
あくのぞきうまんでぶこのおしゆりて承
しもちかいもへそせまりてとこわしあま
物かりもとされしとしわかそてだれてさまう
めり中のはうるよりみそげうそく申さへ
よ強そこうそでいでとかやゆうしげかまそこ
斗あまざむしう人とこしょて守手あまうりうり
まそいでとちうてあてよやきさんいどつくしく

かみのうつくしげにそがれ
たるすゑも　尼とて髪の
すそをそぎたるをいふなり
こよし
きよげなるおとな二人
ひとりは少納言とて紫
の上のめのとなり

白ききぬ山吹などのなれ
たるきて
山吹がさねの衣なり
花山吹は面うす黄なり裏は
うす黄なりともいふ裏や
また山吹は面黄裏よし
紅なり

[illegible]
細石 [illegible]
[illegible]
[illegible]

つらつきふくらかにまみ（目のうち之）のほどかみのうつくしげにそ
がれたるすゑもなかなかながきよりもこよ
なういまめかしきものかなとあはれに
見たまふきよげなるおとな（尼のそばにつかへし女房共）ふたり
ばかりさてはわらはべぞ出入あそぶ中に十（細君之）
ばかりにやあらむと見えてしろききぬ山ぶきなどの
なれたるきてはしりきたる女ご
あまた見えつる子どもににるべうもあらず
いみじくおひさきみえてうつくしげなる
かたちなりかみはあふぎをひろげたるやうにゆらゆら
としてかほはいとあかくすりなしてたてり
なにごとぞやわらはべとはらだちたまへるか

すこしおぼえたる所あれハ
尼君に子の似たり
何やうと源のこゝろにて
すゞめのこをいぬきがにがしつる
いぬき いぬきハ [illegible]
上東門院の上童に犬と云名
あり栄花物語にみえたり
てうらにきこえたれど
ありきたる犬君が 師説
きこえとあるべし
かせこめたりつるは 伏籠
つる籠ふせこともいへるなり
まいのあるものゝうへにわらはゞ
してきいるまうく
河事 日本紀 罪 書に
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
なり

とてあまぎみの見あげたるにすこしおぼえたる
ところあればこ（子）なめりと見たまふすずめのこを
いぬきがにがしつるふせごのうちにこめたり（紫上の使女の名なり）
つるものをとていとくちをしとおもへりこのゐ（紫の詞）
たるおとなれいの心なしのかかるわざをし（少納言の詞）
てさいなまるるこそいと心づきなけれ
いづかたへかまかりぬるいとをかしうやう（雀のまうけを）
やうなりつるものをからすなどもこそ見つくれ
とて立ちてゆくかみゆるるかにいとながくめ
やすき人なめり少納言のめのとぞ人いふ（少納言乳母也）
めるはこの子のうしろみなるべしあまぎみいであな（紫の上の）
おさなやいふかひなうものしたまふかな（尼の詞）

とのゝかく　尼云かつら
られ身のうへあはをもいへぬ
を出てハ如くに我が戒をして
つとめをしらで　河 篭繫
飛鳥沙弥戒經　明星　涅槃經
第四金剛身品持戒比丘
比丘尼不得畜養奴婢牛
羊非法之物
つくつさいとしらうけ
河類函欄蓊宛　日本紀
けりくらしうれ
ますれとうりから
河薫也　細　白ひあつさ
あり　孟曰
細
河雉草　日本紀
師尼の詞よそのれを指て
明秘

絶られとのかゝくかあはをもよみなりぬるかいのち
河雉
孟
細
尼云
河雉

まうくだいりで世よおかつえん
ともちんとしつらんと云
みちよかり蛙立まえん
わ来の為ゐ人もおもひぬ人
とおもよのうしとこゝうし
て秋さきしのり乎んる氏
なみしさとのへく
とう菜の世ひわ来
孟 さやう不知しめすとも
媛君の比成人さ出猶まじどく
けうとく師ハ世抱うえれ
ねなけよえゆかり菜まよ
めつらしふ戸川菜の名ど
めつらしきこととのえぞし
ようしくやうのまぜふかく
尼君のまうろしとよろう文
しとい納言もえうちさと
よあつのや
なよしもいよおかしたる希
師ハ尼君平生うろしく
独居あじ志のこゝぬ事志
られより御こじく源氏君
みどハ山に来りおのれ比し
とやうしハかのうしに

おなげかしとうちなきさせて
ゝ川菜の女ひ乃来もおもしぬきまよいうぞこの
家のうてんとも、しんどゆめゆかり程よそら川
あなさまりきそてるるこハおさかゆや侍らん
なふ志もりしよ女ゝしまうしまつれふのらさほひ
ドしつとのうさま源氏の中将乃まゝへんやこまどのふ
ひまよりのし給ひうきをいまはすかへさしつゞ侍らん
いうしう志の御猶ひれハえしり侍りしぞこうま
侍りらんかしうれしかりとふひかるまゝぞさぶらひかうと
のきまへハ、おみいときしやハとおやまくきゝやうへ
やさつんしてもとれ世にしか川この世よハ乃く
あり給ひうり源氏うしつりつくまろうしてまゐり

居給へるまゝうらしく
うしれ給ふでよえさそまつ
ハ決ほよ源氏と大ゞれ
ハ尼公源氏とえまうへし
やゝとく
哀なかりしなどえつる哉
細 源のかくさきもさまされ
御おかりきふもやうの人
とえ付まゐまいらしてとれ
まのくいのまかれおりくさを
とくる人いいかにあやり
とく

うちつしあん家ま
細 源之本儀を猶之 孟 源雪
わ帰へ帰りまうくこし

まよりんや、よんもえてしうハうし乃きくもち
かなといひじう世のつれへまさとれほまひのがつう
人のほのとく悩なかりいがくほきうそこもゆくもひ
をとしきいそいともとれいがりまひぬれはまう
人とこうかれぞ、この世ときまのぞもぶらう
あわらさとのさしてぞしくさうまじきへ、よもは
こ川らう族なりさまのさうにまらあうぞふう
世ひの御うるうしととうふよしうぬが
とぞそしもいとうつくしうつうちごうる御まへ
すくんぞの人乃れうりよ給くれのうすくささ
かもこぞやと世にふかくうつきぬ、うちゝ
しるへあまよ、猶わの御でゝ惟光とさびい

まきりかゝりける
細 侍従の侍乃君の向ひのなり
まきりかゝりて八過のさまへ河海に
過とさそかりまゝりけるとなく
女行過ハ度へわくりまゝり
ゆく允過のまハ夷吉へ 平声 去声
御なれとしまうの時ハ平
声也毛詩第一江有汜篇云
江有ㇾ汜之子帰不我過云
又山谷詩近ㇾ人積水無鴎
鷺時有ㇾ戯牛浮ㇾ鼻過云 云
皆平声也来心也
れつしくさひあまし云ん
侍従はよくれ寄りてまかへとう
れへよとあてそ我よそれ
夫まひとまきさ也すしとく
くさの花しろ 白あさかれ
いもゐの庵よるさきをまかまる
むしろもそやそくらん
天台大師御忌日ニ慈恵僧正
披露之

でまほ [illegible]
細 [illegible]
[illegible]
人やすよ [illegible]
細 [illegible]
あまうしこのるよ [illegible]
しるしき [illegible]
そひあへてるん [illegible]
早下の細へ源氏の [illegible]
こそ [illegible]
細 源の細之 [illegible]
やまて [illegible]
やそよまて [illegible]
ぐうう [illegible]
しらぬり [illegible]
るしわしはそね [illegible]

ハ子細ありけしきと万一験み
くて八雨の風味もいくと也
まかよ思ひ給とくもも
源の用に[illegible]
ん孟験者といふうれ[illegible]
瘧の平愈[illegible]
てうつく[illegible]
細 源し
宋の[illegible]
きとハ時[illegible]不和[illegible]
源し[illegible]侍従[illegible]
全
源氏[illegible]
みすごみ[illegible]
細 [illegible]侍従の尼君に我は
るかとく[illegible]
あしき[illegible]
[illegible]
源[illegible]孟すへの[illegible]
の[illegible]時ハ世よのくもり
[illegible]
給ゐんや[illegible]
[illegible]
あはれ[illegible]
孟[illegible]
くらひあつく[illegible]不審之

[illegible]
細 侍従方へ[illegible]
おまん[illegible]
とのふ[illegible]
侍従[illegible]
源の風験[illegible]
[illegible]
ごとる[illegible]
れわりき海[illegible]
るすと[illegible]
のいあり[illegible]
源ん
みあまごらぬ人[illegible]
れも[illegible]
つつ[illegible]
ありき海[illegible]

業ふかくしてよ　僧都乃
坊のさぶらひし菴の庵あれ
ばむかし源氏きたりとの給ひし
とぞふかく源の君を
ひとすぢより(?)そうし給ふと
みなもあり　細　[illegible]
ところに文字よりさき本あり
にかなはりて面白くくおぼえ
たちより竹籠もまゐりたり
しりぬんてあらし
こゝろえかうれ　花　牡丹(?)よりて
まつり香とうたゞも牛頭栴檀
なとくみかへ香とぞいへし
世のつねなれ　細　源の説をうけたり
やよいの比此時僧都の詞物語
のさいの数懐の　孟　[illegible]
念この智書とぞいふことなり
とて僧ハ源ヘ對して仏道
常の法理を演説する(?)と云(?)
とぞいへし
かの世のことのやりて　孟　源の心
中有(?)世の事をふかくおもへり
僧都の世の理とぞきこえて
源のかたかたりく

ことによしありて同じ木草をも植ゑなし給へり月もなきころなればやり水にかゞり火ともし燈籠などもまゐりたり南おもていときよげにしつらひ給へりそらだきものいと心にくゝかほり出名香のかなどにほひみちたるに君の御をひ風いとことなればうちの人々も心づかひすべかめり僧都の世のつねなき御物語のちの世の事など聞えしらせ給ふわがつみのほどおそろしうあぢきなきことに心をしめていけるかぎりこれをおもひなやむべきなめりましてのちの世のいみじかるべきおぼしつゞけてかやうなる

故按察大納言　孟　尼公乃父業上の祖父也　河　養老三年ニ始テ置ク按察使ヲ　師　續日本紀に勅するに元正天皇の養老三年にはじめて諸國にあぜちを置けり(?)又後天平寶字七年七月に陸奥出羽の按察使のことを定めり陸奥出羽ハ大国なれハ国司以下の支配(?)を重く両国の政務をつかさどらしむ中比より

すまひもせまほしうおぼえ給ふものからひるの面かげ心にかゝりて恋しければこゝにものし給ふはたれにかたづね聞えまほしき夢を見給へしかなけふなん思ひあはせつると聞え給へばうちわらひてうちつけなる御夢がたりにぞ侍るなるたづねさせ給ひても御心おとりせさせ給ひぬべし故按察大納言は世になくて久しく成侍りぬればえしろしめさじかしその北の方なんなにがしがいもうとに侍るかの按察かくれて後世をそむきて侍るがこのころわづらふ事侍るによりかく京にもまかでねば

納言以上の妻女をいへり
かの大納言のみむすめ
細 源の御心より推量に御詞
まづ 孟 紫上を尼君のま
ごとおぼしめしてかやう
にのたまふなり
すき〴〵しきかたにあら
で
世の好色のすぢなるにあらで
ひとへにまことにいふ
めうと推量りてのたまふこと
むすめたゞひとり
僧都ハ紫上のうへをいへり
あるひハ尼君のむすめ紫上
の母なるをいへるなり

ねばたのもしどころにこもりてものし侍（尼君のことを語りて）るなりときこえ給ふかの（源の詞）大納言のみむすめ物し給ふときゝ給へしはすき〴〵しきかたにはあらでまめやかに聞ゆるなりとおし（推量に宣ふ）あてにのたまへばむすめたゞ（僧都之）ひとり侍し。うせてこの十よ年（ねん）にやなり侍りぬらん故（こ）大納言うちにたてまつらんなどかし（うちへさしあげんと）こういつき侍しをその本意のごとくにも（大納言死去ありし）のし侍らで過侍しかばたゞこのあまきみひとりもてあつかひ侍しほどにいかなる人のしわざにか兵部卿の宮なんしのびて（細 しかるに兵部卿宮紫上の父）かたらひつき給へりけるをもとのきたのかた（細 本妻方よりそねみ）

ここの御もとにまゐりて人をと
うしなひまゐらせしや
細 兵部卿の御事なれハ本妻
とも顔形すぐれぬにまかせて
かやうにひまなく思ひまで
師前よりさうハ心ざしあらう
人をにくみめでたき人に
いとゞ何にそこまでなる
がまりしもたらぬきもり
ともりをも何と思ひあはせさ
まじく
やくさうらふにつく
よびもうめる人多かり
つりてさふらふをすくよ
うらんとてさふらひてハ
疾妬などやうの事なく
孟 進心 古今 さふらふに今ハ
入もねたのぞればいく君
恋とよれかしりぬ

やんごとなくなどしてやすからぬことおほく（そねみうらみなし）てあけくれ物を思ひてなんなくなり侍りにし。物思ひにやまひづく物とめにちかく見（細 僧都の詞有あり）給へしなど申給へばさらばそのこなりけれ（源の心也 細 さてハ尼君の孫也と推量也）とおぼしあはせつ。みこの御すぢにてかの人にもかよひきこえたるにやといとゞあはれにみまほしく。人の程もあてにおかしうなか（細 人のほども云々 宮の御こまめなれ之）〳〵のさかしら心なくうちかたらひて心のまゝにをしへおほし（生）たて（立）ゝ見ばやとおぼす。哀に物し給ふことかな。それはとゞ（細 源詞）め給ふかたみもなきかと（大納言のむすめ紫上の事也）おさなかりつる（紫の上のこと）行衛のなほたしかにしらまほしくてとひ給へば

なくなりしほどに
細 僧都の詞也 女子の一人侍ると也 孟 まへの詞よりうせてこの十余年にやなり侍らんをありしを此紫上の誕生なる歟

よはひのすゑに
尼公の老の歎のまゝにすみ [illegible]

さればよとおぼさる
細 さればよとありつると [illegible]

まだむげにいはけなきほどに
[illegible]

なくなり侍りしほどにこそ侍りしかそれも女にてぞ（尼公の姫君を儲給ひ [illegible]）それにつけて物思ひのもよほしになむよはひのすゑに思ひ給へなげき侍るめるときこえ給ふ。さればよとおぼさる（細 源の心也）。あやしき事なれど（細 源の詞也 僧都にのたまふ）おさなき御うしろみにおぼすべく（尼君へ也）きこえ給ひてむや。おもふ心ありてゆきかゝづらふかたも（葵上の事也）侍りながら世に心のしまぬにやあらん、ひとりすみにてのみなん。まだにげなきほどとつねの人におぼしなずらへてはしたなくや（細 文と [illegible]）などのたまへば（細 僧都の詞也）いとうれしかるべき仰せごとなるを、まだむげにいはけなきほどに侍るめれば（師 いはけなし）たはぶれにても

そもそも女人は
細 いまさら僧都の詞也 明三従の心あるべし

さらぬとてかつく
ふつくいえとりまうす
僧都は今かれ嫁娶の沙汰は尼君にまかせて合点もまうさぬ事也
あみだ仏のうち
紫の上かたく君大納言北の方かれとられは尼君とかく云なり

御らんじがたくや。そもそも女人は人にもてなされておとなにもなり給ふものなれば、くはしくはえとり申さず。かのおばにかたらひ侍りて（僧都の詞也）きこえさせんと、すくよかにいひてものごはきさまし給へれば、わかき御心にはづかしく（源氏の也）てえよくもきこえ給はず。あみだ仏（細 僧都の詞也 安置の所也）ものし給ふ堂にする事侍るころになん。初夜（細 初夜の後也）いまだつとめ侍らず。すぐして（源氏也）さぶらはむとてのぼり給ひぬ。君は心ちもいとなやましきに、雨すこしうちそゝき山風（細 暮春の山中の心也）ひやゝかにふきたるに、滝のよどみもまさりて音たかうきこゆ（細 引声のかうき経文也）。すこしねぶたげなる読経の

滝のよどみ 細 雨によ [illegible]
のまさることく山中一夜雨抄百重泉なとしいふごとし
孟 めやすしねぶたげ
読経のなかみをとりては、あやしうなどかはしきほどの心せとも [illegible]

そくの名くつそく比
細 くまつやうしき傳く所抄
某子云そくの名うまく給き
つでうむかりうつつそくうろく
ろれ

ながえるさくわもくべうかめ
れと 細 あゆりまるそて
も初くぬやうらなくをも
そくか納言君いうりある
くそそ人もみてとうらきく
えひる身ゆやしと也く退
くん書まおりうゆし

のこりくまなくうとゆかなしきぞて
ひもとくろうしうりの哀なりさまして
はしめぐらしくおぼしてまかりまれ
まうでぞやしいひしかども哀もいそう
かけよそりうぬふとへ人のねねげにひし
なくそいし思ひされじどくのけうそく
よひさるすしらぞとし御のさうて[illegible]
いうさなるそてよめくとしなかひあそてう
なりと申まそ徘もまゆくるるされば
まそまうしたる屏風の中にまどひ給ふらん
けくあよぶ代まりしまへはかりしなきこ
もんかめれどさそしゝねやうやうつもる

なりけの御ちくへそくつき
まつりくいも
孟 從冥入於冥永不聞佛
名 法花 細 つくるまつりて
ゆくそうらくひうき名合
なりくし 師 珠数の脇足
よひさかうりれをて尼の
行ひかふ不なれいりのを
ゑうにの名くる詞く心いはそ
冥途よまより流生と申等
まうれいろのあうへなりて
次とく今源の翁をあし路
ともか納言ひうなりやとする
次よひうくにあつをく事
とのみんとそてかりやくへ尼
君へまうまつせずうそん
か納言をまうろんとそてし
まつりく比わつ繋のうへと
孟まくへり経同くの時尼君
のかひそくんかりうも名ね
わつ言を知くらぬと家ぞそ
情んそくうるうさしとまみ
まふを俟のうてまふてま
まふて

まりあるひくあるかりむねぞそておぼ
しひがみてあやとしごとそてなそ
けのほのほなんたれものがるまじきことと
ふかしかなるりのとのつゆのいのちは
とまうあそてなるまゝうにはいそてんにはつる
ひもえいづうしきれいつるうきの御ちよえ
まうはばつるすしともみけよううら
けなりうしばはめき路もんもしとそう
かれど
こ川うさ北わつ繋のうへをこ川まうり縁
ねの袖も露ぞうはうねどこそうしきまひ
てんやとのくさまひさうしよううのれまう

さらにかやうの御せうそこを
花 源氏君ハ小柴垣のかいまみ
しりぬ祖母の尼君ありとハ
つゆしらぬ若草とは口
ずさみ給ひしと源氏の君
の御まへにて初草の若葉の
うへをみつるよりのうたを
尼君に是をとらせていふやう
少納言ふしぎにおもひ給ひ
たるハまことにいふべく
何ごとのかくハいふらん
まてハいかゞと詞也
まくらゆふ 細 若草の御詞を
とりて申されし事ハ尼君子
うへ祖母といふにて山の苔
とハ袖をとりたることの
御旅ねの心よし袖ぬれて
こそあれ旅の山の袖と共に
しのやれかしと 孟 奥
山の苔の衣よりくらべ
な露にこそぬれはまさると 古先集
ひがたう 孟 袖なとし
花 源氏のこけハいつもしめやか

そこうけ給はりわくべき人ものし給はぬさ 細 僧都もこゝ方の御物語もれきこえ給へかしと也
まはしろしめしたりげなるを誰にかは 孟 此人ありてやしなふ人あれはよく
ときこゆ。おのづからさるやうありてき 細 源の詞也
こゆるならんとおもひなし給へかしとのたまへ
ば いりてきこゆ。あないまめかし。この君や 少納言尼君にいふ 尼君の心也
世づいたる程におはするとぞおぼすらん。さる
にてはかのわか草をいかできゝ給へる事ぞ 此事人 細 ちかしとおもひ
とさまざまあやしきに心みだれてひさし
うなればなさけなしとて
まくらゆふこよひばかりの露けさを 尼 旅枕引結ぶ也 ひさしうなれば返しをせらるゝ也
み山のこけにくらべざらなん
ひがたう侍る物をときこえ給ふ。かやうの 孟 こゝろへ
ついでなる御せうそこはまださらにきこえしらず

しく思ふより まくらかはする
この侍らんとし 細 旅寝する
しかされハいとゞひぢまさる
秋袖よ秋の露ぞへとまさる
こりつゝも旅寝の袖へさらせ
んかの人侍らぬ此世へときこえハ
細 源の御詞也 まめやかなるを
くハしく侍らずとなきと 花 左
まそは尼君ハいまゝ源氏君に只
對面しまつりて少納言として
申させまして
そのいかなるとも心にしてかはせ
わま君の心えてものしは
をば源氏のつきずといはく
と少納言なとのやうに
うちつけにあさはかなりと
御對面よ浅きやうなれど
の浅ハあらず 細 ハ
仏はおのづから 細 私名のわ
さうなりぬるよ仏の
とも仏ハ照覧あるべし
をのつからそれぞれ
さうべし尼君に對してき
こえ出給ぬと也 花

ならはぬ事になん。かたじけなくとも 孟 実にハかたじけなき
かゝるついでにまめ
まめしうきこえさすべき事なんときこえ給へ
れば尼君ひがことききたまへるならん 此あさましき人の事を源ハ聞ひがめ給ふらんと也
いとはづかしき御けはひに何事をかいら 細 源君の事を尼君ハ申也
へきこえんとの給へば、はしたなうもこそ 細 若きハうたてく思ふ人もあらめ尼君の事也
おぼせと人々きこゆ。げにわかやかなる
人こそうたてもあらめ。まめやかにのたまふ 源の真実なる御事ハ對面にて浅き也
かたじけなしとてゐざりよりたまへり 細 源の詞也
うちつけにあさはかなりと御らんぜられぬべきつい 源の叔父仏よハあさきやうなれども心よりと也
でなれど心にはさもおぼえ侍らねば仏は 細 わりなき
おのづからとておとなおとなしうはづかし

仏の四志ろ今つくしこにいりて
まく案ハ宮に又仏ハとのろう
らとハ公さしのおさえるな
らぬすを仏も自然よ去ら
せまつへるとゝ中ゝあく志く
とハ尼公のさ雨をいへり
あるくハいけく 空ひもうちぬ
若葉よみやうし 上室に去事
ハらもおもしろく
枕しき雨よ神し給ふを
細 今紫上も母よゝゝくれ
ま給くうましみなる八向
じたゞひ今へし 花紫上
も母よとくれまつり源氏我
も文致よくうれ出へハくぐ
ひよるさせ多へし宮あく
御とふひと六譜よ君ろ孀遊を
とあつらも御ゆや
うれおりもありくてうへ
細 諸切へし今まてつゐてな
くてやうぬとく
いとう作う出れうへ
細 尼君の詞くやうに見ゆり

孟 尼君の詞

つまれてしとこふもえうら出まうでけよ思ひまへりがうきついでようくまでのこ侮えをこうしさみすゝかとおさくはいくとのさゐうふわたれよろけ給いけれおりさ侮とゞのもとへ

細 紫の母北

源の詞 紫上のうへ
まく師 源と紫の御母の御うもみりうかせらし

ひよきんれゝらりよみがりしるいてんやいゝふひなさき柏のしらひそむつきりらくさ人へりと

細 桐壺の更衣のことやく立そくれたる

さらとくれ侍よきれどおやきうらさこうやうめく年月をとしそうろね御れみかどさ侮よまのし給なるとよくひまたさせきまへと。いとこちしまほしうくうかせりもあるゞこ

細 何ともさ后としてうらも

くそまんみだされん而とももちうしずら出作りゆりとうつしすへじいしとまつりとひ

きうしめしひとめくる
細 紀ままおしく中君さりれ
くくつうさらに年なる人
あくうさわやまり給と
くいまに堅固に幼ききさ人
まそあるやとく
わやしき身ひと何と
孟 紫の秋をあらり人に
去あふし尼君の詞
これみなつるゐうしんれ
細 源の詞にしるのなる業
肉と気何ちおもとく
亦世すみがれうりて
世き世づく御あくたら幸
色し給いかとももとく
べしふけるさこしくとし
細 尼君の心ちり引類ま家
いくとよ。去るまりゐとく

ゆまへめでき川しとるみがくしもらゞつめつひぢゝうしなむとや御らんとつてまさうゑずん。

細 紫上と云

あやしき身ひと何とさのゝ人よもうゝ人なさん御れどいはしちざいふゆひなさ侍とめて川らんじゆうきうしゝこも作りぐさきれどえすへう

孟 紫の年少也と

けあくりとおめくれさりきうとの方ふられ後つくまうくぼう字うはいうまの給とくろさうおりしうくうぞおりひまへしうさ侮しとおうちの程とおけらんぎのしこうしまへといしふげなさこしをさも去つらくふふてまの人と表わしてふとけられいつへすみし。僧都あなたよりきぬれバりうづかしそめ給めれバいとしての

源氏

法花三昧をこなふ
孟 晨朝の行事也 河 三昧ハ梵語也此ニハ云正受又ハ名ク正定ト 法華懺法ハ智者大師所ノ行フ法門也 花 止観ニ四種三昧あり いはゆる常行 常坐 半行半坐 非行非坐の四種也 懺法ハ天台大師或説ニ導式法くりあひて六根の罪と懺悔する法門なり
ふきまよふ深山おろしに
孟 源氏のうた 細 義なし
さしぐみに袖ぬらしける
河 さしぐみハさしくむ也 ...てこえ心く花源の涙にも ... 滝の音にまつはさしくみに袖ぬらし ... 山水とハ僧都の返哥 ... よそにはあらぬ心ハさ ... さわぎやハ僧都のわが ... のあけぼの ... 他山の ... ハねとなるらん 又素二青

りしうゑんとぞきこしめして修行暁がた成
になれバ法花三昧をこなふ堂の懺法乃
こゑ山おろしにつきてきこえくるいと
たうとく滝の音にひゞきあひたり
源 吹まよふ深山おろしに夢さめて涙もよ
ほす滝のをとかな
僧 僧都の返歌あり さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心ハ
さわぎやハする みゝなれにけりやときこ
えたまふ明ゆく空ハいといたう霞て山の鳥
どもそこはかとなくさへづりあひたり
名もしらぬ木草の花どもいろいろにちり
まじりにしきをしけるとみゆるにしか乃

細 源のきミみ心 師 足君と源とのこえ[illegible]

心ハさわぎやハする 師 細 孟の御説も僧都の心ハ侍の[illegible]を深く味すべし
名をしらぬ 花 白氏草堂記云 雑木異草蓋覆其上 緑陰蒙々朱實離々 不識其名 四時一色
みゝなれにけり 孟
しかのたゝずみ 細 春山面白き体也 孟 春
鹿をみるも面白し
さしきハ 師 蓑ヌ老
ひじりうごきもえせねど 台 内 胎蔵界金剛界もすぞもと云 首尾之
かれたる声のいといたうすきひがめる
河 歯落ぬれハ声のもとひがめる也 老人のこゑ調まのさ
くうづきて 細 孟同
功くハ功く 功の入たる也

たゝずみありくもめづらしく見給ふになや
ましさもまぎれはてぬ ひじりうごきも
えせねどとかくしてごしんまいらせ給
かれたる声のいといたうすきひがめるも
あはれにくうづきてだらによみたり
御迎への人々まいりておこたり給へる
よろこびきこえ内よりも御とぶらひあり
そうづハよにみえぬさまの御くだもの
なにくれとたにのそこまでほりいでいとなミ

孟 鶴集 えもいはぬ[illegible]
細 聖僧都の坊へまうでし
細 護身之 師 加持まうし
孟 陀羅尼ハ梵語也
瘧病本復の悦びとぞし
内 裏之

こゝろうのちうひ
細 前ふも此二ゟせとも三
年侄山の人々もみしうり
孟 千日籠く
此くみも云 源氏をさゝぬ
御念ま揃ふ是をもまもん
もそうてまごろんちやせん
よの詞也
うしこまれいらん
帝の御心を悟りおひく
まく御宗し侍らよのぬく
それいらんと句とこうし
細 僧都の哥
うとんけの花を源氏を優曇鉢華に比
しし 明三千年に一度花さく説 轉輪王出世さ
三千年ノ事如何 私 優曇鉢羅此云瑞應 般泥洹經云
閻浮提内有尊樹王名優曇鉢有實無花優曇鉢樹
有金花者世乃有佛

きこしめすこともかしこくのちうひらう 禁中の御事也
侍それをくりかへしまいり侍らまじき
こし方くわしうおもひまへつくべきされなずく
きこしまてかへりまいり給 山 孟 源の詞也 河 酒まいりて帰らん
ろとのまりゐるゝまじ酒まいり給ひつ 白孟 くや又此山より
せさせ給ふもいとこまれいなん いまこの花の
れのおりもすぐさずまいりこん
宮人にゆきてかたらん山桜 細 幽玄の哥也 源 孟 新
風よりさきにきてもみるべく
のたまふ御もてなしこはづかひさへめもあやなるに
僧都
うどんげの花まちえたる心ちして

僧都の心ちして深山さくらにめこそうつらね

ときこえ給へば
ほゝゑみてときありて一たびひらく
なるはかたかなるものをとのたまふ
聖 細 面白き哥也 聖なくて
聖御かはらけたまはりて
おく山の松のとぼそをまれにあけて
まだ見ぬ花のかほをみるかな
とうちなきて見たてまつる 聖
御まもりにとこたてまつる みたまひて
僧都聖徳太子のくだらよりえ
給へりけるこんがうじのずゞの玉の
さうぞくしたるやがてその国より
いれたるはこのからめいたる

さうしおもしと僧都の詞也 僧都の詞よ八仙台云 河 天台云 優曇華ハ三千年
一現 現則金輪王出 云 曇華ハ輪王出世の瑞也故 若 靈瑞華 人壽八万歳ノ時節金輪王四列を
遊ス其時海水半減 しうよりて此花出現すとし 花を光源氏を此ぬうへに
とききありてさん 河 法華久遠時一現のら 㖿 前の僧都の哥 輪王お世の心をとりて源氏を比
しとし給ふ 八源氏ハ早
下の御心にて佛お世に比して
て苦まつく
おく山の松乃 孟 おく山の山
樞戸とすれば明てまみえん
ぬ花のきをあさか成
ととそてまつりて 聖
㖿 聖のなよんとうとく独
鈷をまつとみて僕あり
僧都もゑくとまのあつ
抵猶時亘を不思ひせ
師使鈷ハ沙ん人の常住也
細かんまりりのて
よ人の中をまく
聖徳太子のくたらより
細 僧都引おほやけにひとぬく
同本朝神仙傳を引て欽明天
皇御宇聖徳太子六歳冬十
月自百濟國經論律師禪師
比丘尼以下を始て持くれ出

ことなるゝさくに太子金剛子ノ
念珠ハ書傳以下ニ出ス耶見ニ
或人云法隆寺ニ太子ノ念珠
一連あり又彼寺の縁起ニも
見えたりと 花 百済國より
金剛子のじゆずくるりたるハ元興
寺資財帳ニ有九云壽多迦子ニ
金剛子此等百済國所献ニ
也ニ云々但聖徳太子の数珠の
ことハいすこし見えおしはからるさ
もありぬべくよりくるところ手
とバつゞりたるにいひなしと常也
ところかくろよいれく
河 万葉ニ婆利袋報ハくるり
ぬすり袋いづこハ見えてゝりおき
みささにたへしとあり婆利ハ玉
くすり袋ハもさく代袋とことで
又音横通く
あはぶの枝よつけてこ入たりの
河 貴船ハ鞍馬寺の鎮守く鞍
馬ト貴船の中間ニ僧正ガ谷ト云
所あり薬師ハ不動ノ霊験の
状く薬師仏の左の方に絹珊

いまこく五葉の枝よつけくおんおりのつか
ぞよけくとりどもいまこく献さくしるなど
よつまそどころよつけられとくりめのど 細 済ても布施と
をさくぎさそまうり面あり云ハひとつ見
きまく ありつでめぐ經しつほうしのふをまう
はのあれどもさ御くよりよつりけうり
きれバそのこくりのやまで川まですゝるべき
抛じとしなれひれず經などして出家しら
細 紫上のことを尼云よりまうし
まそう川入あそよのさうて結しことお
尼句く
びこうしまへどいふとゝかもしすでにまいき
こん人くさまししりにころざしわくふ
盃 向来
今 四人年しとてとそハよりうりと

さろり抛き華よ業とされ
てそえ男ハら醫王の業
たりおもひよせうさや
粥 師業ハ田たるまうし
よせあり
名まられあるよ花の
細 尼君の方へのうらえちと
えるひしらせとあのめり浚
花のまう男と花よそらく
てしみさえくらく
まことさめや花の 花 尼君
のあ句のもて切ゝ花ハ源の
ふらそ抛ふ下 後のうるをを
りをむうといべりおかめむ
ていふろなどハもとめいふと
立ゝし 乗 源の句を見とさん
とありなうさ花の上よのとを
よあうこ又下のそてもあるさ
花 師 花のあそうハ立うさと
のあふもむと徐うやえ仍ら
ん・業の数よ立ぞ抛ふその
まふるハ徐とうけうもしと

尼云…
のまへじさうんと地ぞかしさ面よのくあ
源のくく
と月いるましと地ぞとれぞうそこゝそう川
のまとありちいささわしくらして
源 師
夕暮れはのるよ花の名をそそけさハ
霞のうちぞまづちふれ在し
尼
海こともやや花のあまりうきとうさく
もとひろ雲の気色よもさんどのしある
てのひとあそでなるよぶうちもそていさ
細 蓂上の又井く
れ車まくそてまうう花、大簾しらいづらとく
なくておつしましにきうてともやくとれむか
のんぐく公達などあやうく出かりまへり。發
中将左中弁さへしぬ舞ぶら人も志子ひめのく

下んよ語りえく花のかをり
もの八乃字よんなへし
うちとそしらいあり
孟 さきよもそ髪出めかす
うきあふ尼公八縁遠

とうくの手れ　細　山寺〻に同り
侍れく面白し何り
つくきのきれまへたるや
ときしろ乃ちのすへなる
やゑのよし井にえつ玉を
つくやまえつくゝ殿え川
くや催る楽葛城
人なりにしとなら君ちら
細 ゆうくひなき殿上人分
ようも源の御衣みかくハけを
さうりこし

てぐらやうのたよりもハつらうまつり給ふらん
と埋りひまつつとおきましくとくよさ給（源のさそひ〻ぬるすと之）
まうらうく根えとしてひとつしさ花乃
げよあうしりやもとうりとえくうり給ふ
んハあるねわざられとのあいうしうくれ乃
君のへるなすゝねてぐうつうけまひるおちらく分
水のさ殿たぶじおあり殿の月も也珍中ね・ふと
こうかりき笛とり出てかさきものしうり
弁れ君扇さらなゝうちらしてとよら
の手れみしたうやしうえ今よりハことおもう
まへらうたうと源氏のさといろくうちたやゑ
し君よりあまへなはたびひぶすくゆえ

ひちりきふく
孟 篳篥 在末摘花巻
さうの笛　孟 笙 説文
云笙八十三簧と云くり
師 女媧作笙又簫と云八大
なるハ廿三簧長一尺四寸よ
かるハ十六簧長一尺三寸あ
又楽器編小竹簧為之参
差不齊象鳳之翼云云
俗おさうの丸と　孟 琴　師 陳
暘楽書云或謂伏義作或謂
神農作或謂帝俊使晏龍
作制長三尺六寸六分象朞之
日宮廣六寸象六合弦有五象
五行腰廣四寸象四時前廣
後狭象尊卑上圓下方象
天地云云　孟 白虎通云琴以
禁制淫邪正人心也　源氏日
らうきの時にもとふひひまる
のけ地のみかぐくうつれるさ
御うりとひつり侍紀琴を
わふうらにさくくめやもえらん
えうぬる　細
山のゐるり　伯牙鼓琴而

れありさ殿まゞたしかゞしみをめうつつ殿
じりきゝ例のひちりきふくぎいぢんぢう（細 うとゆ洩よひちりきおもてきう人あるべし）
のあしりう世さゝもろき殿なしあり。侍郎
きうんどうじ川りくまいりてこれさぐ（琴）
れひとり川あそびしてゆるしくけ山寺（師 面白き詞之んとすべし）（侍詞く）
よりも御ひちりんとおちられえさき
まへハぞうりろいとえんがうさしりのとと（細 源くの語つ躁ぎし）
まつしきくまへとげおみくうにたさまつ（上白基の毫忠にぬてこの本ハまくき抱ちえ誠なるべし）
しとされさうこうぎひぬおろぎとくうわ
といふひなき源うしなしつべきもみそぐ（侍紀ひくらの前く）
とおとしあへりぶしてうちつまハ年おいうる（尼君の前く）
あまぞゝさうたうじさうくようるる人のれあり

六馬仰テ秣ス　孟　瓠巴鼓テ琴ヲ
鳥舞而鳴キ魚躍テ而遊フ矣　列子
師　此山の人々僧俗皆源に同
驚かしく人をして哀し
うまれ侍るしいとむつ
かしき日のもとの末の世なるに
孟　此の僧都の詞に光源氏
を優曇華にたとへて憐
の世に生れ給ひしを又
僧都の此詞あはれし　花

かの人の御子になりて
源の御子となり給へと也

さまを見ざりつればこの世のものともおぼえ
給はずときこえあへり。僧都も、あはれ
なにのちぎりにてかゝる御さまながら、いと
むつかしき日のもとの末の世にむまれ給
へらんとみるにいとなむかなしきとてめ
をしのごひ給ふ。（細 紫上也）このわか君をさなごゝちに
めでたき人かなとみ給ひて、（細 若紫の父宮也）宮の御有さま
よりもまさり給へるかなとのたまふ。（尼君の女房の詞也）
さらばかの人の御子になりておはしませよ
ときこゆれば、うちうなづきて、いとようありなんと思し
たり。（紫の上の詞也）ひゐなあそびにも、ゑかい給ふにも、源氏
の君とつくり出て、きよらなるきぬきせ

かしづき給ふ。（細 源氏内参也）君はまづ内にまゐり給ひて日
ごろの御物語などきこえ給ふ。いといたうおと
ろへにけりとて、ゆゝしとおぼしめしたり。
ひじりのたうとかりけることなどとはせ
給ふ。（源氏の詞）くはしく奏し給へば、あざり
なども物すべきものにこそあなれ。おこなひ
のらうはつもりて、おほやけにしろしめ
されざりけることゝ、たうとがりのたまはせ（天子の御存知なきと也）
けり。（左大臣也）大殿まゐりあひ給ひて、御むかへ
にもと思う給へつれど、しのびたる御ありき
にいかゞと思ひはゞかりてなん。のどやかに
一二日うちやすみ給へとて、（細 大殿我方に請じ給ふ也）やがて御をくり
つかうまつらんと

いといたうおとろへにけりとは
とゆゝしと思しめすなり
孟　此詞のゆゝしは源の顔色
を御覧じてゆゝしうおぼし給
かくゆゝしといふ詞は不
よろしきさまにいひなすべし
きことなりと云々
あざりなども
細　阿闍梨（アザリ）　七高山阿闍梨
近江國　比叡山　比良山　美濃國　伊吹山
山城　愛宕　摂津國　神峯寺
大和國　金峯山　葛城山　毎年給
穀五十斛　春秋各四十九日
於件山修藥師悔過　称云
天下ノ五穀也　兼和三年
いとたうとがりの給はせて
源の此ひじりのおほきさまに大臣の
おむかへに出給ひし事をまうしあ
ひて云々
一二日　ひとひふつかとよむ
へし

さしもおぼさねど
孟 源の心は葵上へはさして
ありしくはなけれどもさえ
こぼれしハひきいりてをを
すゞしり
細 源と葵は上のせはりて
大とのハ奥の方に葉あるを
師 左大臣時の関白なるゆゑ
源を責めすゝめふれ大殿
にうつりくハ車のあらそひの
ことのふかく
するゝほどしく ありし
孟 師 葵ハ源の心よりつねにも
大殿の御なからひハすこしよそ
なげかしくいとしく思ひ
ぬつく
かしてわきまり
源の方へ葵のもとへ来
けり

とものへてさしもおぼさねどひきいられてま
そまゐわが車よの世してまりうき 大殿の人々は源との世あらく
く身づからはさいつかてしそそてまりき
おそしづきまじくおぼゆるはかゞへのあれ
なくとぞきこゆるすゞしかくおぼしまつ
きこ殿にもかつしもきこえんとふつひ 細 葵の上の方へ
ましてしくてまつるほどいとどみ
うそたなるこぞうきこしらひすうびどもの
へまゐり女房はいのちいくれしよみ 細 葵上
ものぞ給もねど地ぐるしきことなりて 左大臣
くらうきこえまうりあまりてそでさへ恋す うこきまうぬ
くらりのあひめぐらしの心ばへにあはすへられ 葵の
てうらうじきこえ戯ごとも思くうかがひ 所の侍る
うてまのしきこえしらひまゐらするを 源忍之
めやすきこゝろばへ物語をもぞきこしらん 物かたり
ありて地しうそらいへきこえ殿つくでそ 助宮之
あそれなうめ世にはなくもとげざうと
さえ川しきなのに地まほどしてどう
さきはうくばそへてはらうのへぞそも 源の詞
さうをいとくらしく思ひづくりまさく 源
のつゆかすうれしまえめどこそや。まへがうりま
らひ給しきも。いうでどずそりせちひしきま
ぬつそめづらしうこぬことおきれと地
うるめしうと思くおふうらうして 葵詞

そなハつゝき
奥入 君をいつで今人は
うちくもせくしハぬハうつ
きのとうしらきん 思ね
とうつはるまも思ふれどもハ
ぬハつゝきわずをてきさふ

所 源の物ひ給ひしともいひて
ところ世の中くるしみ給ふ
花葵とみやうよのよ給
ひて源の葵をとしいまたを
つくろひるを思やり給也
まれくハおさきりしの
細 まれくとハさ給くのおもひ
あつことぞのかやうなることを
うつくまつし 抄 かくこの人
のまうひさずしてそおれ給
まあまりよとりぬハつらきさ
どりつのハ思まぎさく
とりぬるすくりよきさく
孟 思ひてつうひるずとも
本よこそうらくおきさず
さるるハおれとく
うしやいのちさるよとて
細 いのちされんよるを小柚
まらバ何かハ人を恨しと
こん 孟 葵の心とるそう
ぞきんとなり 一 え花に
らぬ今心さよ舎おくらハ
ふまるやきもろし人やとハ
ひひまりてきさるよみし
紫上まことに幼なれて
いるよさまへて 何として
とりまんて毒よむしんとと
兵アマ文ハいとおそしに
細 おそなりしきがひやるみ
るとハかうて白ひやるを
るとはさやきなきつるし
明 兵アマ文ハうわひやるを
ちがさハおしくと
ひとそひしそうに
河一 一族 花 是ハ文宮よハ
似あつく前斎の女御よ
おかしまふハあやしく思
あつくともにひろ右服を
れてやうよしきとうても
一つりのよそしまふやさと
ひとは川ささい服
所 兵アマ文の御兄弟あまさ
まりまひ世た前斎と八一服よ
てましゆをとさ見よ兵
アマの娘の紫上乃前斎よ
似よう御らんしさし

ぬはつらきものゝみやあらんと思ひめぐらすと（葵の詞く）
うせ給へるまみにもけしうはあらず、さうこゝろうき
川くしおぼされけるにやかうまれくはあさ（源詞く）
ましの法しやうぢはぬたのむとしいふことらく
ことよこそおぼされ心うくもの給はぬそうろ。
ふとたまひうしろめされけるすゑしなりし秘ほ（生ずしれる）
しかくあるかりめやしなときさ御かうざ候よし
こ申しゆうとはぐおりほしうとむやもあらう（きき）（源と葵の）
しよしやいのちござるまとそこちかの世ゆるにに（御寝所く）
入まね。女ぶつつんかくもいうぬなでせめしよくとつら（葵上く）（源の葵よりひかひ申也）
ひきそうらたびきそのしまゐるもたまんむ（若きほく）
づかたらうかやあらん。ほめこげるかりてゑし（源の注し）
てどくり世をかほしらぶうてこしとかほりうのめ
わかうさの地ひいでん御ぞのたくとゆしさ様。（細紫上の事く）
ゆげすき母じく思ひしおこしてもうぞうし。（尼の心を察して紫の事く）
いひりげてさこしふをあつうみいるよう申へて
くざころやもくむひとりておけられのさぐ
さあるもらん。兵アマのゑハいとあくよた御（のまぶさまう）（貴の事く）
めひまつれど、あわひやうよたどくもあくらめを
いうぞ物のひとぞうよ思てしあつらんひとか（紫の上ハ何として伯母の前斎よ似まつるぞとし）
きさいだつしたれバつやたじど物の御をぞゆう
甲のとむつましうるよいうでしりとしあつうれ（明く 細小心への文く）
わ母をぞ文の日れ文をそしずられのかり。借（何としてうかぶ物よせんとて）（まよ思え）
初ふも日のめつしさめべし。ひのまうへま

すてられしくの空室と
しき　尼君業平の歌
とりて捨られて片かせし
有涙の色かやもえある
とさでもをとるん行尽くる
百敷又くろえとまつる
るをのらし　細
西けハ　あて八重
えしく光くれ来されを西
鶴八男とこえられさらし
疑のすの風も　細 頼まる
こ比まてし乙てろつ梅花
夜の男此風のうしろめたさ
ま
とうめくとしつて見ろ
細 花かる義むす姑河海致
いゝ　花 河海よさて文乃
かすとてみつわかつて条
聚記よみてより艶書の字
と候今業義紅の落模二首
この寺と出てとりしててら
ひまとひて墨を引てそをと
又落模一首まて来りし

はかりくるれさうしれぬしきの浦くおし
さよ細ひまかうさ海をむえあしらりきてそ給
らむてかりめしとかんかむりきてゆうふく
もとしかへさしぬらぎしの月どもあらん
じきつらばいつよう巻しうかぎしわりたから　業平の
なりし
よちいさくひき結びく
係 西けハ影とちれれど山桜ふのさかり
とめくらしどこのま此風をうしろめたさ
くかんと言出てかどいさうりのめくらで
もてまうとしつてとまへるぞ海もさぞこまざき
ぞられ光ともかはめともやよこのまし
細尼君のく　うしきおいみさりしりやうりしさえん

るし落模とかくくさりてひらりて頭をゆうぐこれる墨を引不引ハ白紙也河とつくるそ
ハにて文ゝ艶書とよそみえれず本紙ゝ堀川院艶書合にも同大納言紅のうすやう
年まとしいてそくらやう埋木の色よりもわりぬ
まぢもとさくられ光ともよけ　細 さらハ中のまへ鈴のすゑさう
こさむて鷺く
ゆくてのれこしハ　孟 鞍馬
寺への通つてよめせてるそ
とみいすしつるよわらくへ
ませまつるとハ鞋の通使あれ
わざ常まくしるされよ的也
るすつさやうハ引もかき
とく
まで雑候はとそるよ　細 御衆
八男とも合るれその在寺
とハ業平のしまぎに衣はまぞ
自物かくとさへられとそく
し給つどとこ高れるまハおろ
まで来ゆのるくし。付け細書
の会すといまさこ歯まどとん
汲まうハやさよハおのこれ古
今序に難波は浅香山の古
とよ歌人の始めも言ふ
といつるまくいろはのやう
に一字づつきてハまなびたる

とか目しまづらふ。ゆくてのほとしたる僧ざ
孟 叶ふ　細 同じおやし
里からと物まひまへかまされしとかりをへきせ
師 振也
せきるとえんく
いに入家よさてしさをんかるくかんすぐ
かするつばとぞみうくしうつ寄くろ
業平の御文をりをうとすぎて
ざめれへひるくかんぞそも
孟 さそはりて寺へかかそこえし
尼 あつしかくおのへ乃桜ちしぬるとこうと
光るお月どのりるさいらしうしろめくさうせ
尼君と同し心やるかし
ありまうばのれくりも相あどさ海みれば
係 くらおしくそ二三日ありて惟光とぞくさ
これ
源 細く
てまうれま。少納言のめみとくいへんのかし

ともかきえぬと云之。させてゐるするは其ちるあらかきこそはやりいひしといへるし

あらし吹　花　源の哥ハ紫上を桜によそへてよめり。尼君の哥ハ一向に花の上にていへり

勘 師　源の文に夜の間の風もうしろめたくとあるをうけてあらし吹とよめり。上にハ花のさら

ぬほどにとゞむるといへども、下にハ源の紫の幼きに心をとゞめ給ふを嵐

吹山の桜のちらぬまに心をとゞむるほどもはかなきと

いふこゝろなり。いとうしろめたくとあり。細 紫の父の宮とうけたまへり　師 源の心にかれ〳〵ならんさまをいふ

まかるゝねと　孟　一様まをとあり

とあそびしさみ古哥にもあり

河 和に片帆真帆と云詞より

出たり。まほハたゞしく

さしあてゝよくもみぬを云

事よみなし

くはしく此詞しのまゝ大事

此やうの中ありさま

惟光源の紫の事のみひつく

るさ何文源の平生などう

よきなり

ことばおほかる人　細 惟光也

河 詞多品少

いひはぐくもなり

つき〴〵しくいひつゞくれど

紫上ハいとけなけれバかゝるされば源の

ねてくはしくかたらへなどのたまひしらす。

細 惟光を云　師 源の好色の心からく幼き人をもとめ給ふを云

さもかゝらぬくまなき御心かな。さばかりいは

けなげなりしけはひを、まほならねども見し

ほどをおもひやるもをかし。わざとかう御文

あるを、僧都もかしこまりきこえ給ふ。少納言(せうなごん)に

せうそこしてあひたり。くはしくおぼし

のたまふ御ありさまかたりきこゆ。

古便 ツキヅキシ 遊仙窟

ことばおほかる人にてつき〴〵しくいひつゞく

れど、いとわりなき御ほどをいかにおぼすにか

はなちがき　河 放書(ハナチカキ)

に云ごとくにつゞけずして

一字づゝかきたるなり

細 難波津などをよくならはし

給ふ紫のてならひちらしかきたれば

ふくとをしへたるやうなりと見え

なるべし

あさか山　河 あさか山かげさへ見ゆる

山の井のあさくハ人を

おもふものかは　花 さゝのうま

いはぬことにやうつりて

あさか山といへり

古今序の詞とぞ云也

細 かねしられぬ哥入るゝ

の哥乃よりせぬ　師 源

ハ我とあさくハ思はぬ

かゝるあさきもてあそぶ

汲そめて　細 汲そめて

めて浅ければ神のをかみて

山の井乃あさき事寺のご

とく悔しくやの事其下句

ハ我身をひきさへとて歌を

又よへきハみせらし歌也

ゆゝしうなん。誰も〳〵おぼしける。

孟 ゆゝしくおそろしく　尼君も僧都も也

御ふみにもいとねんごろにかい給ひて、かの御はな

源の文也

ちがきなん猶見給へまほしきとて、れい

本もまた中にちいさくひきむすびてとあり　葉への文也

の中なるは

源

あさか山あさくも人をおもはぬに など

山の井のかけはなるらん

尼

くみそめてくやしときゝし山の井のあさき

ながらやかげをみるべき。これみつもおなじ

ことをきこゆ。このわづらひ給ふことすこし

よろしく

孟 尼公の夫按察大納言の家也

このごろすぐして京の殿にわたりてなん

源の心

きこえさすべきとあるを、心もとなうおぼす。

細 三四月の事なるべし　花曰

ふぢつぼの宮なやみ給ふことありて

らうへきハ源とあらうへき
なり
これらもおほつかなきを　俳考曰
上のせうそこもうへの御ことのごと
く棠をゆるしもつねさ御之
花 権之なりまうりて尼になりにハい
まさ同篇をも申させおはしまさず
みなうへひおほへし
細 かゝ細云の乳母の御之い尼君以
雅るつくひ路程よ今から放か
とくてとなり
王命婦　孟 藤壺の女房也 細 王
氏の命婦くたまりさきま
藤壺よ源氏密通のよしあり
ひ物語の作例なとは好て書
もくく極意もわきまへかたし
とかりいるかたふくへからう
明 河云密通継母之事 則天皇
后八太宗の妾々後為高宗
后 光仁天皇后井上内親王 聖武皇女
桓武天皇給 井孝謙妹
哢 みくらひらくいとうしさハ
やうしきれ言ち
善悪よつきてらくもそれ

明 三条の宮へなり
やうてまいりうへの御ぞはゞかりたげき空
こしふれ弁しさゞを、いかいかひおかしうさくく［源の心ぞ］
まうりおほくろうかわりぐさめとんもあくが
まみしひて、いつくみゆうくゆうで給え源
内かくも里ゆそても、あらハつくとなむめと
らしてくられハよう命婦をきありとき御
ふひうしそぞうかえん、いとまりなくしてとなそ［源心］
河 事八かりせよ 許為字 万葉
あら源しさんぶつとは物かしめぞまひとき
花 これは源氏君女房ハちろうきまう給るよ此御よみてくり
や、宮もあさぢうらしぞ物おしかりぐるまよ
とくものれ御もひなうくなさしぐるやえなんと
今源よ又逢まかうまとなくらえ
ふう英しうろぬいとんうくていそらじさにれ
御色なりのりしかくらしうらうげる

おもしろきのめうかう所なるよ
花 源氏の御心よ前薨を
おもしろくそうなるべけれ
所もましく語ばかりう
とりあつかせるもくれずて
人の心とのとつてさせ給へん
とせめてのうよ号ろ給之酒
当帝るうべてとしれ
しきにてまとあつかひ
きとはるまうりたろくなり
孟 恐つけるれかうふうぐもあ
らハてれど難めしてやまんと
之 細 源をひまりさ御のわると
明 新井ちすべつもましれつ
しゝえれくのうし
ぐふの山よ　細 只くうくさふよ
て秋どもさふかさうへし 古今
秋の山の月乃光 わられ公う
みの山をこゝねてくるう
宮路の手みもえくらり
ニリひさまうくふの山よ宮ども
ぐみわらきて 秋葉や山ね
又出うりを丸く よの山をう
らうちろるの老君乃

さりとそしららけど、むかうたら何らし
おぼつかれけく なかしこのおとを今は行き
孟 十分ありさうて
世おちぬとおもふるのめ弁つこらずさまうち
おじつ紹いぶりきんといつうさんぞ物が
細 この事もるきほ之
さうて、なすまでしとは出しつゝくまうん
花 秋の早くあはれぶるきなるやかうハちう御ができ
らうふの山はやかりもてう物しまれ
まてゞおやみくたうそうう秋みくおき御
しう中く也
源
そもまさ逢秋もれなう夢のうらよ
細 孝の字 妙
やぐくまゝうう紙男とうもいれどむきそう
世の中御もさみすがるいうとまれだ
花 これ不意
世のうりよ人やつゝんでひそかうな男

まうくや 此分ハ延暦三年三月内裏の息乃寺三箇の内之 明 始の字清濁両義也 さらくまう
いの时ハ濁之 おやみハ清ハ 師 かまうわうあく緬をさらく宋くしとハ塗りひもかさんく
こそしま又 細 源の寺へ逢ふても云まさくもし唯夏の中れやう寺れハ此夏の中ニうそわ
男も云しうせられうし 孟日師 うえ薄うそも云逢ふの揃ふ中寺れハとのんこ
世うらりよ 細 熱向両向き寺くだまと男はかりさくもそうのうすハ人の云伊べきさまと 師
まても物世ざうりの名を歌まうく花 源の夏乃うちにやぞそまぐさうすとまうとも物男を夏に
ろうさげや とらめらくへうさき男どきめぬ夏も同らくさめぬ夏といふハめらがうらの義まハわりぞそう
あうさ世どうめへしく人ハやつくんハ物男のあうき伊のさめしもくるみさまく
おりにうらすれさう云も
孟 夏の源んと源の世かりのり
やうたきり
れうかしなさいハ
細 女ふどにまぎれてまうりよ
ア陪説又ハそうへまそそ云れ
しおどしめきさ久婚の井に
騒まおりしく 二条院へ
あうしねよわらしして
何れおうすの今ハたまき孫の
夏すうそでいつうハ君とも又も
見るへき上東門院一条院
崩後の寺之 孟 花鳥ままる
こまハねとなすくどうらく
しそうう阻ろくいめり上東門
べうかうも物そうしうつ乃くと物すわり
な我いとらうろうさ男おうりもそうと物わり
すげくまなきやましうさも物さりもて
まいりまぐべきされつうひ志さうれど物わり
さんぢやくろうはれんらきいのやうしをれ
しやきさぬハうろうようし人志れど物
とくをありされバらろうくいうるんと
物ぼしまづらあいさ給どハいつくど物
ゆへのうく
かまつでこのさよおかりまへハいとう
どうめうく人じここそやうりとぐうしよ
ようよ死れもくきの陪どんうし人ハうらら
しとかれどこの月までそうをさせ給ハざり
とさあぬ夏になりしてこそ物わりしうされ
さ海も いとこらうりようじけなし 今始乃
君ぞすれるうやおしくへうきこあ小めりそうる
とれよおきらしてわきうねよあうくし給何世
めでたくども世いのけらんしうさぬのるあ
まバうねのことなびうもつうういうど物も
ほしわれてうらへもまうで二三月こうりお
しろとれバまかういうまうめうと物。小門の
とめをいのろうのゆこと又じ
源ハ方の別よ任然として此書也

細 源の病
丁寧しく 仲 孟の御説ハ嘆
慶あり
又いつろうめりし
悩をとみいうにりと也よ物わり
ある名もろれそうへ物さろうしさ
とし 孟 源の不来と帝の陪
しりなきとあれハ源の心ちる
そうう物わうろしうく仲 夕霧
いきらみも源の物すくあらひまひ
しかあれハ又此夜も事も
と帝のそうならろうへし
陪んらも例のやうなれども
悪阻なるのんくへうや
三月よなりうまへハ 孟 懐姙
しての三ケ月之 細 四月より
六月まて三ケ月之 一本二六
月とありいさる月とうしひん
しらハ同るすく 或説まに六
月とおろくとむ月と説らく
説あり不可説のうら十一月
冷泉院十六月よ生給と云
ヽそ生給之 明 花云 生年
二月十余日冷泉院御誕生
細 懐姙のこと 師 源氏密通の
懐姙のこと
源氏との前世の縁となりて

十一ヶ月に當ル
この月まてそうせさせ給ハ
ざりけることゝ
細 人〱ハ何ともしらで奏し
給ハぬをそとゝ 師 帝へハ上奏へ
ぬをおどろきあやしむ

弁命婦 細 二人の名也
河内本ニハ句を切とこゝ
也表紙ニハ弁の命婦と讀
也二人也王命婦が乳母をとめ
也 但二人ハまことそうるかの
まいるべきにや 師 御めの
との王命婦が姪の弁の命
婦也
いひあはすべきにあらねば
王命婦も弁も心ひとつにおもひて
ことに人もきかぬ
細 これ人もさやうの事を
ひそかとく

おどろきゝこゆ。わが御心ひ
とつにはしるうおぼしわくこともありけり。
御ゆどのなどにもしたしうつかうまつりて、
何事の御気色をもしるく見たてまつれる、
御めのとごの弁の命婦などぞあやしとおもへ
どかたみにいひあはすべきにあらねばなほ
のがれがたかりける御すくせをぞ命婦はあ
さましとおもふ。内裏には御もののけのまぎれ
にてとみにけしきなうおはしましけるやうにぞ
奏しけん。見る人もさのみおもひけり。いと
ゞ哀にかぎりなうおぼされて御つかひなど
のひまなきもそらおそろしう物をおぼす
ことひまなし。中将の君もおどろ〱しう
さまことなる夢を見たまひて、あはするもの
をめしてとはせたまへば、およびなうおぼしも
かけぬすぢのことをあはせけり。その中に
たがひめありてつゝしませ給ふべきことなん
はべるといふに、わづらはしくおぼえて、みづから
の夢にはあらず、人の御ことをかたるなり。この
夢あふまで又人にまねぶなとのたまひて、
心のうちにはいかなることならむとおぼし
わたるに

細 源氏の御子とわかる
師 ほのかに懐妊しまゐらせ
王命婦也
内裏 細 みかどにハ内よりも奏せるとぞ
湖月 むかし
細 源氏
夢とき人
細 源氏の夢の事
源氏
の御懐妊の事

こ御ゆめしるしとみゆる夢
細 けはひも宿世ありけることよりも
花宴にそれなりにうかがひみて
らたに御けしきも見えてそれに位
まつりてうへ殿の夢あり
あはさきぞあやしとかき
けれども思ふ夢と後くの
夢あり思夢とは八はかれ
孫の夢とかしひとつの
これらし安夢とハまことの
らもなさずと見えり妄想
の夢とハまことしき夢
也殷高宗の傳説と夢見
鄭之朕兆の夢と云は
善悪よつきてそのしる夢之
丁固か松と夢見しが十八歳
ましく三公になりし江淹
か五色の筆を得しハ文
藻日ゝにあらたなりし
是なり源氏の御夢ハ
心見てひそかにあはし
その中よりひめありく
細 花鳥ニ夢ノ不吉ナル事ニ
花 是ハ源氏のみことこ

大人の仕子とふひなしうるやうの事く行海は左遷せまそる八いふと出わへ侍り左遷八
縁尺夜のまよしわり菅丞相の作るしにありぶる事く師須磨への左遷のよすかこのひくひ
ぬりもむし彼者の親まる或くるりされともこ八左右のよす八あへそ
侭ゆめあちちくへ人はさずねぶる　何　水原抄曰善悪夢不可語人ニと云本文ありそんくとさこ
今案只是隠密のらく不可及本文も出法ニ

このゆふを語くし
今二ふひ菅丞相よ先祖八
ありきこくそり
命婦も出ふへり
出さ名別ある事とく
七月ありそりてぞ
盂蘭盆とひしてよ
むべし七月とされ八お遠
まうく菅丞相の系図なり
細　標姫四ケ月なるへし
みづしうあらくれゆく
細　内みも結くわりめを
なり

このゆふとはうしこゝしもへど命婦も
さ今はふしもくつけうもづいうさせさり
こふうしにこそくうべくきうれしぎうるすき
ひとらぞりのゆゑりのくぬさうなりし
もさしらそよりら七月よなりてぞまい
つまずきがめづしうあるされまそいふぞし
き汝出るひの有ぞうぶうのあしとくしめく
らうはたりまでふうちやゝ出りやをまへる。
将し　くし、げはみりのなくめそしうし、いの明き
細　標姫

しうさよのくあり八はし
菅丞相の御方よ帝の御わり
せまそく
御あそひもやりく
花　世もやうく源しくなる
何ふをいりて孟日
細　秋かもされ八て
うりまでしの人八
花　葉上のう八いらまうひ
しうらくなりて六条京
桜の里よ出給ふすく
みつし海よのくあるも
細　いしけあるさりしのく氏なる
のおさく　孟然掌もるくて同
篇のなりて
ありしにまそら　細　引ある
用らく今八うさしさえさるせ
ひるきの仏おりしまそらく
何あてのあ八されら別のる
うくんあつうしにゆさうるさ八
さまし　も　花　謙徳公集に
さん今八と和りて何るよまそを
しにゅうる物らひ八されら今
素菅丞相の法まく

しうさよのこかつしまして。わあひひこと
やうくおうしさまるなれば、源氏乃君をも
いとまきすくめしきりそしつけいしとあえ
なでさ海ぐくよつうそしつをすふいうし
うつさえへど。君のひゞきさくしおのおり
出さおりくさぞさすかさことじきと
おかく出ほしつずまぐりぐのやまでゝの
人へいしうゆくいぞ給ふよさり京の汝
そさらしるでゝききくのにせうそこぶそ
ありしもれしさ海よのくあらしこて、いりなる内
よ出月しるをおりしてりすさる、りのさひ
異事
まゝとくなくてさ別。秋の末つくさ、いと

秋のすゑつかた　孟　おほよそ七月
よなかりてしもうちそへに
秋の末つかたとあるべきを
てへし
月のおもしろき夜　花　此段
よ所ハ雅くも志しと六条
京極のあたりなるべし又
京極のうすといつるよ此
つゝゐし
あれさら家のこうち
孟　是ハ六条上のこしん　花　此御里
かなり六条の御こと
うくらう　本閑也　麿樹
の哉こさ海なり
故おせち大納言の也
惟光源氏よりもことぞ
なり
あまう人いたうわづらふよ
孔上よいふうかなりて
そくくと見みうくいの光
瘉まて再発せらるゝや
うつしよへうりわうとおもう
さきんしも　尼君をみま

まのあたりばかくてなげきそふ月の程にし
き夜ふかくひきる所もうちしづして立ち
まへるとしぐれめつくうちそくく心もえも
もの所ハ六条京極わたりみちく御ぶまか
なれどむかし行しときならしうるはおれ
しも家のこぶちいとよのかりてこぐらう
こしよりはう例のれともよくうつれ忍
られこ河なん右揚家大納言の家に行り
一日のさうまよろひて参りしば
のあまう人いたうよわりまされば
こしも参しどとなんもして行しとて
ゆるしのはかれのしかやのらしまく帰へうかまとう

よおりとハ者やしくされ
しそり
わうしくくうらよりり
細　つらくなしくてましく
いつもくなり
いをひろしきよめれど
見苦しき所なれど此係の
御訪ひの志をきふ車をぶかや
さんとそうくりのかうさ所時
所へ入るとし
ゆくりなう物かうさ
孟不意也　細うちつけま
くことさきとそまつろせ
やうかうりとし　師　おくかうさ
彦家も開く此方と云くし

殊なりつれんとものぞかりしいつりて
そうろことをうしのまへバ人いまでくあるぞ
あれわぎとうたうりまるるくいと
をうれいうりてうくれしつとひよなん此く
しまうるといふよ此ぞろうさいとうう
ちくいとまきこしれこの日ごろひげよい
とそのりしげうくすくせまひよされども
むめんなぐとあうりしとりつへてこう急し
まそずめらんそうこしてそみるさこれひき
しあきつくろひくいまてそまるいとむ
つりきを行れどうしこまりやつまくて
かんゆくりたかうりのかうさ此りし心あり

つひよりひまへもるかゝりし
細 源の詞 孟 孝に訪まいて
きこえ給ひ侍れとも御指
心のやうにはあらぬ事と家
ふかく源のおもひ給ふ

ふかくこゝろ八いひやるともなく
細 うちうちのことゝなしく 孟 返
例のことゝ問より尼公の返答

くまうしたまへとしかくひ
細 いとけなきことゝちと年齢
もうさけなきこと也
孟 紫上幼少なれ八ゆるされかたし
く幼少人数にもなし

なんとすゑ。げによう侍る事はいまよりひてれ
おぼつかなきと思ひ給へられかずならひおぼさ
御ものゝ給くたまはせ給まつれ侍りて
なんなやませ給ふともまうしもらし給
いつかうたるもたまつかれどもこゝろし
もぢりごくらいつもとたかくるべきに
すのえ御よかり侍く。いとこそじ思ひれくも
ちよくせさせ給ふるに。けりうちすてさせぬし。
のあつかひものをもちいし御さきるも不少
しめらいぬやう侍らかくうるき
しくひまき侍くうつりくずまへき
まいらじくん御そげはまへとくらん

いとかうかれ八石山をやけたる
細 年ごろさ安井かなれ八かく云邑
とも源のまゝなくしく
てといかりて候まゝまへし
この君にかゝりしこまりも
細 紫上今ちく成人もあり
八只今の御あつかひをはしますと
はうらしくもとまうべくこちの
とし
やかうおほくいろ人る勇人
細 源の詞 師 是八尼公の
とりことを柄とし心ならぬ
源氏の御物まゝの給へる
おりくこそくゝうにさとく
しきさ御をとらへしよかり世
て月ほど御くらし大方れ
とのゝし
いかうちおもかふかくても候
つりそめしいに表にあひ
こうしゆるもあるし給へ
孟 いかうちがいたう
思ふかよいふ八不当の
とくせの御を給

細 紫上のさまのおきてもかくく
絵げいはこゝの御さしに思ひたまへられぬべ
きたどしまつりにしとこたまれもいろ
御そげにすいかへ思ひくしくてゝいとく
細 いふこと 白
尼君の詞
うちまかせまつもはゝかれ。この思ひゆるよう
細 此文対面のこと
と申てまかし
しこまりをはおもひすこし御もしなく
細 源の心の給ふこと
あしらかにのあるおもひよさにあてたまふ
あらくいひ給へうらと思しく
こうみをしくそまうかいたまへ
かくしそまうりそめしいはかり表にいひ
ちかう
あはれ
ゆるもあやしきまでくはせのことはかなき
孟 白
又源の詞
えは侍らぬたゞしのすてひとりさきらの
孟 紫の御心をと源の事
えし給をどうのいまけなりのしきのふ

らぬところ羽西白きところし
此世なそそ八ありく巴孜重
世のうすとくろうろのおや
しこ八不書とそ御く
ろへ。そし二の寺まおりし
紫の何く孟尼君を何ての
まつへ出るく何心もなさ
さ御とそろへし
いさろんしらからのあしさそく
仍あこしのうひしうれ
師とこ八不知く人々ののあう
御とうふをりやくとそるゑ
孟尼公の源をうえたれからち
の西さも座ところしの手
と紫のつるくさうさこそ
しきうをときとくろしく
尼公へ戸さうて何ありぞろ
し八それそぞかまし

細か物え何し
由ひとく糸いかぞてうしのおへいうかや、まろり
紫の由霞ありしと何そ
おすほしまくぬさ御よ地かたくのこりかりけり
紫の来きへる志源の世ろし
てたどし学ゆかり志とおろすくしろくらを
尼君を幸む何く名立の…
へさころく
とげてしてんへそこの寺よおりしげんしの志
しそおりしさおれかしころ結とねとめのふ
源氏へ紫の世ゆりのこりし…何のかうれ
とんぺいとうこうしうしとひておるかう
紫旧
まくさそし由いざとしらばからのおしさなづ
さあこさとのあしらぞうしこしてきさうし
さてえさうと于摘志そくのまふいとしおうしと
きてまへどんへてのくろしとおひすれぞこさ
志実たら尼君へのおろ通の何事とし
うぬやうかくまあやうみまうれうとひとさ
こしどころそてくりまひぬげゑい…

細源の用志く紫くとハ知すあん九人くろしけよとひすろさ御とみ…
み結く
まめやきうゆとあつし
手くと大和物語を引て釈しられとも…
けいつみひたまのちさひや
まさりしかり
細（いちほ）
いち声さうしろの二つ名
細衣アハ衣ぬ良をつて
まあへ尤此なふとくハあ
の一声とことゑ結しおびむ
ハ絶やうぬしえなうし…
ハ不自由くし汀えうさを
かうてうぬくたろじハ泥
孟南しゃにるうむと八源の
我まふをさしてのまで
あすの（しあ）人へかや
湊入のおしらふ小舟さうう
みかくあかし人すやえひ
んとおひし古歌の歌て
さもし小船漕うりれ
あし人すや急きなあ

河（ぶさん）
鍛色遊仙窟正背（ハ）同
まくしくきく去宮ありし水原抄よ未義の
細源のらくしいまうこいさけさきこさ御と与結てくうくしへくろくえ
のまちひやさりともいとうそしへてんとれ
かとみの月をいしまあやかまとんてうかき
こくし結例のちいさくて
源 ひるうるのふまん紫のとと…
いきけたくこく川のひとくし糸ふくしよ
孟然し
まあしまま…ぬむ舟そえるくぬみる人
右
みやとこしうしゆさうれくうさしまある
細引ぶ
もいそしうおうしげたすれハやうくにハさん
細かあ納え
ゆきんで学西か納えそ学のしうさとくよせの
へるハうね紙もとくしげさげたうさ御かろく

やうて世にうらんとてくくし
ともせるるもとなりともとどしけるか
山ごもりにまうでつゝ経をそ
おはしましたりしもまうでくハ
しかみなとふかくめぐり
この世のことそもさとく
此御文ハひの厚さハ末代ま
でも云れよしくれハあの世
よりもかほんと尼君の
死ぬるまでも細工も以てく
今尼君ハ阿仏の事雨なるおり
かし頼ふうききしとく
ミしんそとおもさ
細かひさんありうもちて
ぬすりの家ととりてもと家
そききんそこそらねきことを
し此の事本もとひ出す
かし
ほまつてそうしももん
細いう君御のもへこそ
紫宗の一かゆくよむさし乃
あのなく河海抄可證
これより紫宗上と云名あ

孟 紫家にまうで 細 かの細工文の如く尼上ハ小山へ出給とく

山でらにまうでつゝ経よみくらうしつゝ
せまるしとまりたゝの世おもふでしとさき
えさせんとありつし哀とみがきて経乃文
をぢして心のいとゞ御なくのこ笑 乱かく
人の心ありよ心とうけくおもうらなん
かゆりもつ経にひすりしきことまうり
経おするべしうきしんそうかまことあり
ゆかべ地かりいぶくられてでいにしくをもするる
まかりやせんとさまうにあやう
てまつそていひしうとらんむしさぎ乃
浄よりしひからけ道の御ぎゃ

娘く此紫家の名字に先立てるてくに
宣旨のゆゑりとらくつく古今
かとつかあれたく下署
十月朱雀院乃御幸
朱雀院ハ後院之天子脱屣の後乃ち在所く三条の朱雀
表の御所にハ宮多御門
に四町に造しまうり延
と朱雀院とす御り十月
の御幸ハ紅葉の賀の事
なるへし 細 紅葉ハ賀え在るにあ
昇く紅葉の賀さて八月の
なるへし末摘花八損保元の
中末摘の中とよもあるく
うらくへつるし 細 常の通ふ
人にせたまてる宮すしさせん
かなくと立てそれもかさと
同給へ宝にも同じくらうの
同行と同名にまさくを任ぬ
此歌多し此物語之説くん
とかへし
そらおろ月の九日 孟 此家の
上乃祖母九月中旬の比まて
ハ六条宰相の家に住し

十月に朱雀院の行幸あるべしとて
あんごろうさ家のことにとも上達部殿上人もとも
なくしめそのことにつきてくらしにけるれちん
をきえれだにとこしらへ花よりもそめて
すぐのぞしどもなりしひきふにを山ごと
ひとふとひきしうをとつまいて雨はふりぬろ
ぐふかしあくぶうけくへつゝかしさり聖にハそ
うぐの夜中のこまりうちあく月の廿日
のでよるすん済みよむあしくこえてすへるす
てをけんのでうりまれとよりあひしひまかね子
どかうめここ世中に

今日九日まで山にてうせ給り 世間の道理なれとかなしひ思ひ給ふる
二御息所 細 桐壺の更衣
まことにそれの時のことにて
思給し 牡丹花 みやす所二
是まて八十三才の帝
さもそうの明応中文亀
のころ世も御世の事
とて是をも八十あまり不
と是をうつしてつかう二
徐ハ其れは世ならへ給ふもとと
のすべし
のことなりしこと 祖母の服
ハ三月服八三十日之まて八三
十日の服あるべく

うしろめたげに思へりし人もいかならんおさなきほどにこひやすらん故御息所におくれ奉りしなどはか/\しからねど思ひ出でゝあさからずとぶらひ給へり少納言ゆゑなからず御かへりなどきこえたり忌などすぎて京の殿になどきゝ給へばほどへてみづからのどかなる夜おはしたりいとすごげにあれたる所の人ずくなゝるにいかにおさなき人おそろしからんと見ゆ例の所に入奉りて少納言御ありさまなどなく/\

こひやすらん 細 紫の上の母
君をこふべくとおもひしてと
継母のうへにいとひつゝ
ありてあさましく
いとむげにはあらしね
細 一向二条三条の所なり
八京の別なくもありぬへ
しとや十歳あまりなり
八他人の中也 何事も
しとなりつらるべし
あるなりしに 児なり
なりておとは云ふなれば
なきは継母との事
あまりさきなりてんしの
ありて世もなくなりぬ
わら紫の所ありさ段なれ
又継母ようにてあふ
りてふんなうしりなと
尼君の歌なりしとて
かなしと細しのみなり
細 系圖 紫上の兄弟三人
あまた中なく一のあふ
りとこ人なるへしそれを
口惜しく 宛 若宮の事也

きこえつゞくるにあいなう御袖もたゞならず 宮にわたし奉らんと侍るめるを故姫君のいとなさけなくうき物に思ひきこえ給へりしにいとむげにちごならぬよはひのまだはか/\しう人のおもむけをも見しり給はず中ぞらなる御程にてあまた物し給ふなる中のあなづらはしき人にてやまじり給はんなど過ぎ給ひぬるも世とともにおぼしなげきつるもしるき事おほく侍るにかくかたじけなきなげのことの葉はのちの御心もたどりきこえさせずいとうれしう思ひ給へられぬべき

御女つまの和乃方几腹こ女一人冷泉院の女御く又一人ひそうろの后の宮えこの
かハ不載系圖
くうくじけるこころの源ーしの紫ハ　孟　源の君今出来るよ給ひられとも御心とゝろ候と
なりうずずハそとしきろかくるずやりさ給とるへし
あし氏御心をさうしりゆうきさせさて　源の御ゆまよるのうろうゝろましきと云うゐさく
もしらもまゐつ御身うれいさうさらのよ成るの上乃源の君ぬ上ありしひてもあるへ（こここ
としにをわしいうらんとおうこゝろのゆうかさらまこれゝうゝうへゝきくへ
ゆとしこうくとわるひて
紫の上年のかしとりは
おかさらさとかり花の宴
世より紫のおさるき物乃
やうふくくありおりひきひ
られてきく
一ゝとしうらかしん
御としてあ道世しところ
ゝくへ細　其いる給ふまきこ
そわつかきこゝろれとく
播人にてなしくて
紫りまよいひましせ
らうきしたり

めづらしきおりふしにはかりうずくるにこそしも
時節とし
なかなかひたうさ給おもりのしさ給つるで。御
とゝしうくもゆらびてすしひさまへれども。いと
うさいゝく候とさるる。なさふかうかゝくらり
かたるあり
くへしさうしなさうしまいらる心の御心どほくさ
孟　源の御心をうまろうへし
さまつうんぞのいふうひなささ給ありさ給の
わられはゆうしう苦しゝさあゐも紫りこと
六花世常にあらすとぞ
よたゐんうろるいうしさかひおりれはうら花人

あしつうの　細　節のころさき
まりうのゝことよせてより
ころさまくとも立ろゝう
細ニ心八筍同なりさ忠之新
勅撰潢人不知　前まての
滴りまきこれてつ白傍の立て
しこまへ八音増りあとも
めさるおしくもんと
細　無筍同とゝ人侍うて嗚
えありとてハめさりうしらんを
より渡の　細　源の御心をそ
純志しくてありひさるかうさ
さらうさなるへしくさ
なるそこひさうしん　細　引意
なにと譲がる紀栢坂の宰相多
の詞と用給ひかへうなへ此執数
夢御りりんハうさ御一家ハ
あゆうぐいたと好むとし　河人
それを弟ハつそげたりまを縁
てなしと職さうらん和坂の宴。
伊行只ハはいりそし意さうらん
とうこゝ奥入ハこらしうさき
とあり理可然

づらしてくらうしせぬや
源
わしきの滴よこころあハうくくとまこそれ
孟　対面ありくとあらうてハいりく候の御さ此殿之
さうるがらく人る渡りハめざましらんを
のちまへハぞよっこといとうしこまれとぞ
少納言むしとゆうし
少納言
よりなさの心もましそで上の滴よま御
めるひらん猶しそうき此らうりなきこと
細　少納言ら乃わられて此女房ぞとやりし
細　素仰たる事と
とうこゆうさ御のなれさらにいそうてさゆう
孟　少納言の祈源の感あるを
されまる御すそこえさらんとうらもそ給
源
へる紙あれよそへてありうさへぞしれへつま。表ハ
細　表へ
うへとこひさうしまそ。なれさこうしるへ今ま。
紫上をうへと八尼公こ
紫の上乃祖のあひての意なと
あそびゑさしものゝるをしさうる人
極ひ歓の詞く
の此をすら。夜の此きしいまうとなめりと思
細　文字あるこ
さうこ

みすのうちへかへりをも
禄も他人へと背ひ豁也
くさとあらぬのごとく
こゝろしき人とさまてうま
さなして
紫上ゆきころさきみあつちそ
侍りしき源と御もてなさきく
あつかいちの也衣きさう
んとのあふしとこちあ
つるこ
ゆき・し　孟卒（伊勢物語）
さそふまつの也なり
されば心そらうきよの西海
とうそなんとそて
細御後見せよいまうらハふ
ひなきさ御きまなる物とて
乳母の事也

ゆれバ（紫上ノ事）おきゐ給て少納言よなほしき（紫詞也）
たりつらんはいづら宮のおはするか（細 源詞）
てよりおはしたる御こゑいとらうたし宮
にはあらねど又おぼしはなつべうもあ
らず こち（細 こちまゐれと也）との給ふを はづかしかりし（紫上ノ心）人
とさすがにきゝなしてあしういひてけり
とおぼしてめのとにさしよりていざか（細 いきの心のこと）
しねぶたきにとの給へば（細 源の詞也）いまさらになど
給ふらんこの御ひざのうへにおほとの（源詞也）
ごもれよ今すこしより給へとの給へばめのとのされば
こそかう世づかぬ御ほどにてとておしよせ
たてまつりたれば（紫上ノ事）なに心もなくゐ

まどろしけれこく
細上よこぬとひとり給
ふ事にてもありなへまと
いまて紫をさとり給な一
あへし　所　紫上こ成とう
ちうけて紫を心こめ給
つるみ給へし

今ハまろそ思ふへき人
尼君なくなりて後
ハ今よ源氏そ紫をやしなふ
人なりうとみ給ふな
といふ也
きこえし　あしせあふとも
前よ人にてあらで紫の
よらせたやとのあひし
とうあそこうべ　紫上御さ
あさ給源の御あつかいもあはし

たまへるに御手をさし入てさぐり給
へれバなよゝかなる御ぞにかみはつや〳〵と
かゝりてすゑのふさやかにさぐりつけ
られたる程いとうつくしう思ひやらる
手をとらへ給へれば（細 紫上の心也）うたて例（れい）ならぬ人
のかくちかづき給へるはおそろしうて（紫詞也）ねなん
といふ物をとてしゐてひき入給ふにつき（細 今そまろそ思ふへき人今ハ）
てすべりいりて（源の詞）今はまろぞ思ふべき人
なうとみ給ひそとの給ふ（と聞てあらうとこ給そと後也）めのと
いであなうたてやゆゝしうも侍るかな（少納言源の御ことをさしたるなり）
きこえさせしらせ給ふともさらになにのしるし
も侍らじ物をとてくるしげに思ひた

こゝにとまるうね
御持み給ろせられし源の作
せうあふ詞あり
とゝのおもんへかく
源の妻みゆくおりしまさん
となるこよひとあり夜
くもまつくめまかし

それがさりとおくるは何どといふてぞお
らんおほ纔にじよまことぬらざしのほど
どうるそてしまんへとのおふあられなり何
まつりいもぞごきよのさ何なり、いひぐらうん、
むぐねまよ心からくてむろし給ふんとう
ちるいまそでいとここむそでぐるき行れば、こう
うしいりの、よの地そろうしき秋のさ何おもあ
あをとの井へ人そ作らんぐんぐちうらふ
らい里よりしとそていとなれがわよ、み根のう
ちよぅきいざききそいりまへでおやまう地も
ひの作りよりしとあきれて、それもあくみざる
わしれうろめくしみりのみしと地りへど

わしゆしうまくそてしこころぐべきあるねいう
ちるげきつくみくなり、わが思ハいとゆそろし
うハいろのうんとまるあくれくいとう川くしき
なそぶうつきも、そぞろさむげよ地がりしう纔
らうらく地がして、むらんへぐくりと思ひしく
こそわが流うちもうが、いうくそ地そらくお
へど家ようちうくしひまでいぶこうまんへよ、
地りしき思ひもと地がく、むあれあそびおど
まうふ前よと、心よ得くべきことをとの給ふ
せうひのいとおゝりしき纔地されさこうて
らあまいとりうりまもじらむでさすのまむら
かしう給ぞいくまみ、みくどし給さるし

わるまし　源　男女とよまれ
君よ号もて　年まりまし
ゆかくし
いとうりうしきゆくさつきとも
そくろ達を思ふよ
源偏愛　淫語执愛色　遊仙窟
作そくろさむ思ハ身の毛
ぶりんく
いさ言あへよ　源の二条院
へ渡しまらんと地おもて
ゆへ思なしとあるる所へ出おお
われとさそひまかし
ふりも得くへきことをの給
葉のくりうすふつきまか
とのく思かし

〽まろしき箱よ物かし
細 源年のかくもあとさり
あるハ二下にあるおもへき
物をと申ふとく

〽ことまくうたかありや
孟 源氏の物さまのやうゝまん
のなかんたり師 紫上ハ
物さるさきよりかの御き
ハまことのうきりありて
かくりまかやうかなる故く
くてのこハいりく
かやうの事紗しき麻のハ
紫上いうて候ゆうえんとく

まへり。夜ひとよ風のさわがしくまぎれつゝ（四ノ女房詞也）
ゆんきこしめしはらゝにうつろはでう
らまし。物ありしくハまろしき箱にありし
ほこきまうしべとざしてめきあつり。めのとは（か細云）
うたろめくこさまにいとちゝうらみしかし姫宮を（三条子也）
らしふきやうゝろよ。夜ふかくうらいゝくまふ
もことありかなりや。いとしう家によこゝろ（細 源詞也）
てまつる。御ありさまなど今ハましてうしこ時（家の）（源の独侍の京二条の院へ）
のまも物思つゝるゝをしおけるれなるめ
たえる麻のまもくしてそまつしんかくての
こほいくよのどら海にらざりもどりと

〽しはす十九日 花 十一月九日
比尼公の中陰なるへし
此時ハ朱雀院の御幸
なまとるゝくへし 細 十一月
上旬彼行幸以後なるへし
〽よのけしきもおちゐやう
花 舞々のはるゝ文みてく
ましませとにくし
くなるよふとく
物あのしうこそうそく
細 うとくしきハ文云六吉
同事にされハおとうしを
思ひくゝハくゝりてあらくるゝ
なへききとく
〽いまゝりそそてまろれど
源ハ今ゝゝめてこゝろへと
文意のむつかしうりこゝろにおぼ
ゆるもらゝしあるかんとく
〽くゝしの事さこハ
細 云の衣くあるりてゆ 花 実
の欠ある人今そくゝハ一
しかり 〽くゝしきゝと

このしはす十九日（ナ又カ）まゐる。はじめてまゐりしもこよひの
かとこゝ夢路にまどはれしかなと（源の御人文意どもの…）
もまとくふくならひのくるハ物れしう（源も文意も同）
よそうとう覚えてまかめ。いまゝりこゝそ
まうれど。おさうしぬ。かづしハまさりぬべ
くるんとぞ。いとこゝつくつそぞろにゆかく（源の紫をし）
おまひぬ。いうじうつきりまされかそらくも（美子也）
ぐすぬよ志もいとあろうそとくく
あとのけさうまかしりめへき（ける）。
さうくしうおひおそくいとしのひて（細 証とあるハ 孟 此詞）
うまひ殆そろのごちかりそくと物がし（来入る面白く）
ぞくりちしてなせあへとざく

わさわるふい　細妹ノ門傳る
あ入うえせて手ぐはふ聞とり
面白し　師傳る源妹ノ門
やせあの門ゆさるなわそや
我ゆらいふち氏の教とや
わるるへしでさをさ下畧

立しまり　教それ引しそく
なとく立よりうあ葉あをし
るれんさえろへきみをあうぬ細
をとく細　ひそうるるさ葉の
なんさしよいさりへきと先傳
らむ所んこしあわへ主と
ゆかれ主へくとくば後撰の
さりゆて主あくつむあし
く後撰今よい何のもしまわ
あまりさきとひろ主細
細古の納言にまへし
なうりあしく　河　六作
のうるは　細わもをうお
さりりるいりりかく分と

人なしうひなくてほとんどよこゑあるな
人してうこえも世話　源の詞なし
あさぼらけなきうしろすがたのまちどほなる　源
もしもぎがてきこいもかゞつれどかさこつり
うちひさるまじうしづらうさうしもぞうひと　二疋
おしく
あちとまりきりのまうさこれなどさうは
ゝさのとぞうしよさそうりしもせじといひお
まくいりぬまさ人もいづこねばかくるさそ
あさけおとまれどもあなゆく宿もさもしさ
なくてよの人ゆえてぬ。ゆりしりつる人せん
うぢりしひしをぶりなへくらしつ

くつきこうのえも
細考の後撰のまよいふり
そてよゝく拙者へきこ
しのくとさせまく

けやの府をさ引しかとし
わうれ
八丈宮のまりあれば何の要く
様わさるきあとわらむとの
こうちなり

めのとは
細つれのてまえへしまそ
わるき後まを主あのをるる
のひさまをあし

まつり日うつりゆくのうつりゆうくく。
かを居りのままくべきしのちもまたいみら
給ぶやうぐうちとさうてもさうひねまあてり。れり
しさ恩なじをやりまうへうしこまはもち
さえよくうりしまえうりとしでわすりもこ
よあつあれあまりひらりまのみうらる府
のいとく人もくたまよさびしまれだとるくう
あるくうる府ぬは以ぐくりちゞうしも母されれ
さ人のまぐし給ひんだくとうしこまそて
まそまりてんなまの府をさ傳ふるをあ
らむめのとはさうじなとあくさうひ
かん恩いわりき人つだれとあれそまろと8

けそいとかへくとんなし
御よみかしうり
けそのころやつれぬく
尼君にもなられ久しき
ゆへよりしらぬうしき
とくし
ちしろもあつしし
細 父宮の御事尼君の娘
まましき物をれよまえの
北方へ入らくしうりし
と悔しく
なまめかしきもくるしき
宮の上せさるをきれしよ
こころかりそくしまめ
今のうんらてようそて

よあるべく、いとかうあへし給ふまんなかなかの
細 御子の御かう事也
ありともひとせしそれ御むつかしう
のねうつり君のいまじうえんよとこう
へりまされど北のかたひや、けはいはべ
いとなへくとこうわぐうしげかなみなり。
としごろもあはれとくさにぞ思ひる今は
そひ出る事ぞはべらばおかしこころはなりて、そ
継母にも大胡のやうにとおぼしめすの心
なすくしすんなんぞれのをにもおやまし
今とハ兵ア卿宮の北方の事紫の継母也
うきとここ給ひ人もこつまめわりし
尼君のかくれまでの今の御かへる事也
とうつりあれみしも物し給ふをとんぐ
か細き詞
あしうかとの事もバなかはらうあり
そくしひとかしはいりてしかりはいん

もてかしづきし
細 今ちかきころもつきそひ
てとりけり
よりあひつゝひそかに
細 尼君をしたひ給ふべく
なまめかしきも
紫上より尼君をなむ
しかもまかりねむと父宮の
方給くなせさるなれ北方
しかたく今もうらめしき
ひとまくらし

もてかしづきしをんなどもかうやうのむつかしうなりなんとて
世ばかりんまをしくハ御すゞめのしるゝ。
よりあひつゝひそかにしましまゐらせ
もとよりしめきてしてげにいとうまき
孟 紫上をもとて父宮の心
やをまうれどいとわろくよるつきに
くるしめ、なまめかし二心地時てつま
細 父宮の御事
はかなき人の御ことはりかひふしこの
尼君の御事
きあれバなじくつらひ中にしそゆれバ
くしせまへ給ひにこひ給ひて　しかしとひて
紫上の事
かいまへハこゝもとむらかさもさいとう
兵ア卿
さひなうりするそよのとゝかりそまうす
ふる北へ入ひそとく
父の心ぐゝ
ゆるんなれど。忍びしうたへど出ぬ
すぐさめまうく

なくりもうすくあそうつく
紫上兵部卿のみこりあ
かえ給ふとさうひまて

別がハそてまさうつけ
さ給ふと　尼君とし給
かもひるのわくいとうく
まろうりてうすくさあた
まゐく

まらんくさきと
源の使してそのまうそくの
例し紫の方へまいりつきと

なぞりのうすくさあそうつゆてさねまくりゆく
さきぬ身のおしんしかまじもまぐくよせがし（さ給へかさるまき給ひし）
志くれしでうし此しらさるすりおりあつ
ましたしまうひて今ハなさき人をぬすひ（しるは別まひしをすし）
まきりとせばしがいうりしらるよ（紫上の此なれ給のさ）
此くらかれどもねはさしかさずりてれ（敵をとらへし）
いめやうみもあそびのうつてひつしさそ
もまさうりゆ給とクくれどもうなれだいつ
じうくしまへぞってはいうくうるまぞ（屈せるさし）
終ら人とたじさあまへくめのともおぎさ（細源の御方より）
おくり給ふのれしりはいらいはとそそ（此内より）

ふくるしうさくそてまつり
しもし　紫のうへハ居まふ
さ給源のいとかしくがり
かせハ此番れ流なしとつ
いまうし
赤らさきまふもあうのひてれ
みうくも
師　源のそのおん身してはへ
し添てまふれさく源の
歯痩のさらかれはふきよ
でもおうさまきとし
わのうりしめまま　孟抄乃
らしめまま妻かくになてハ
兵部卿のあとしめて呉く
とハ折檻おひんとそふし
さかしぬ人さの如くうたあらそ
紫の上まつさうそおとうへの
源器故にゆそのさまもお
来ちくとしまへの折檻し
まへとく
おきうして　孟折攝てにし
とん人と訓して云詞し
おりつくのちや　今やうに
てかくすまのらよハ嘗據の

めしあれバなれんぐぐうしうらそてまつり
しもち川ふなくしてとのぬへそてま
つまきてりあらうさなすり給あれふ（細が細云の身して父君のことなそて）
ねみくもすのつでめまこのれしまふさ
よしめつけバさぶうみ人へづのとあらる
ぶふぞさいうあまりん。あるうしこりうつる（細 紫の上ハ此源の）
でま。いそけなくうらいぐくさうしさせさ
まふみくどいふも。それどいはふうふまか（紫の上命と堪ふる）
うしぬぞあさ御しらや。か細云いうれころ
よ衰ゆる抑張どめしておりへさくのちや
さうべきれもとそのが徳をさくしあうさぬや（吉世）
うきあししへさいまはうけくよいしふぬ

ぐれるつむらふみは源の君へ
まいりあそはすもあらん今
八紫上ゆきあふなれハ源より
まおくらあそはし少納言もうら
み源のくらうま紫上の事をも
何らしらすそとおひさき
めくくおもふく

くなかうらい　おもふる
其の色なると思ふへし也
つくりしうおもふめとも
ねと源の心をうたかふすす
たゞおもはれぬつつしく
しうおもひしく
この人もさとありつかまや
おもんなし　少納言の
のこにいそく源の紫上
姫の事もありうやおもん
とおひおのれハされおきさ
うらくしくいそうらしき
らるもいろすふうふり

げにまさしくそてまうでくとおもほえて（今訓）
ゆかしの絡つきうもいうるうれんはより（我かてく）
しうなきなうらうれ給ふ出ふも言ふもくう（紫上よりしろめききすなくつえもくし）
せかひそくしうやもくつきまうれんかう
なくわくなしきまよりの結りせつる（紫上とき）
もひとまつしうじたまうりへりつけ
もをきごともとひおしれそゞりつつなぐとひ
てこの人もこあらぐにみやうふえんたなど（惟光之）
あひなまれへゞつうたけりしけれもいひる
さきとこいふもいつまうことふかわらんとん（惟光ん）
えうううとふまりてありさ後なしやあ（細惟光之うち気をく）
ゆれんにわりしゃふやうれんしゞなそうへ（源へ）

いとぬ物うしとうらすも
宮御わりつつとわり
と惟光に仰らくおやちへ
く少仰く
すてらよもさぞうなり
紫上おさなきかれらハ路
りんも他のこさしもいうな
道ハ二条院へひとへ遠んと
ちうりゆや
をおそうゆや若君もさん二
なみえたる詞なり
としろのうちもぞうふをされ
也んも
それハ離の字之年比何な
出しなる御所をそなれて
とかなり

ひとゆめんもさそでうよもそうろうなりからう
てうどくしうかくひゞめうこと人へかや
かりうらんなむぐくまし出れたにさむ人
ろんとうりをもかかゝはさびくしてまゝ河
出すんぐうれいは例のこふふそゞきてまつれ（惟光之）
まふさうろいしぐりのありてえまよりこ（源よりの消息の領し）
ぬとぞうりゆやたゞありてやいりあす（細少納言の方より御返事）
よいうまたむ人まよの絡まふせうりつれぞ（紫上とく）
うろおそくしうくてなんとしうぞうろ
よりぞうふとれるんもさみすゞうよ心陸そう
あうく姫んでもとひそうれてとゝうこと
じくなるいひさくあさくあへしらうず（とかくと惟光をあへしらうなく）

あげまとをうくるて
にあづまハ和琴の異名なれ
ども又東調ヤマトシラベとて秘曲ある
常陸帝風俗の秘事ノ
四首の其一ハ東調なり世俗
[illegible]
すれバ[illegible]花 和琴に
スガガキ
菅搔とて神楽
催馬楽に用る[illegible] 五ウ
拍子は八拍子にて三ヶ拍子
は[illegible]又箏
にも毎楽曲終に[illegible]を
菅搔といふ 暁一線情
講人の時ハ末ヘ鳴て曲の
[illegible]
ひとつに八田と[illegible]
何の[illegible]八田と[illegible]
れと[illegible]山をて野[illegible]
[illegible] 風俗の書寫方 細
古来不審ヘ源中最秘抄に
[illegible]
不及沙汰[illegible]
[illegible]

地のひい[illegible]たむけ[illegible]

細 葵上の御方へ
惟光ゟまいり[illegible]ハ大床に[illegible]

盃 葵の例の[illegible]

[illegible]

細 惟光[illegible]
盃 云て 日本紀 細[illegible]

[illegible]

せうれバそれいよのつゐれ
るやうれハくやしうんぜ
ハいまこ卯かたれハ文字の
忌あらんもそくろさうわ
さるらんとし
まそら叫しぞんハ
細 とりかうしてハさし祈紫上
女の方へやらるゝとし
かしこまいりてせうよろ
へまいるの作と
かしこハ二条院の方よ
源のつんまりてうるそねず
あと失念しあふて今
おひおのへハ此おおのそと
し紫の君へ此おおもらん
とそうくのまひるとし
かと去ぬまのれあさる
孟源の此おと去ぬ物の
门とかられしお車を入
ららし

のついたりちしやのさかねいぞしままへつるん
もりてまうでそびろきべきさまと聞えしこゞさ
かれどさてもいとしくらゐしける
べきれハまづ葵ゆらう出給ふ女君れいのまぶ（細 紫上也）
ノいまからとしけれどもの給ふこゑいと（源詞也）
をちよりこゑべきこしのちゞる給ひさまひ
物らくなん言ゆりまきゝるんとそ出給ふ（主人殿の）（やそらいハみりのまんと）
へハさふ婦んでもあらきりりわびれう（葵の方の気も秋ちきさまよきとて）
さみらく此たそそれどハいそもろられに（内みらく源の此体也）（思ひ出て）
川だりとるよのぞそ出うしぬ。門しらくこ（紫上の宿）
うせまへハ給をもらしぬりのあけうらよ（ひま）
車とやらしひきつれまさでしらかつまじくと（紫の霞の衣の袖）

きぬさくし
あそしてまうけバ少納言らして出さこ（推光が声とし）
さうえうよおりしまいんじおさるゝきへん（細 少納言詞也）（紫かたと）
源のうへのうちなく
此よのゆりてかんなじらいと秋かうりさ（細 その此袖あかりてし）
とか細言八思也
ちいぐさせまへるを物のあまりをすひて
いふなんへもしせまへかねさそのさきま（細 源ノ詞也）
ひと
ものこしまらしさせじえんとそたんとの
まへバたるよくなたぐらんいうよろく（細 少納言詞也）
しされいへきとしさせ給ふもとそぐう（御きさ紫の君をすゝめうちさきとく）
ちまらひてみそうらうきいうらまへバいうと（細 源の詞へ入すつてし）
きさとし少納言の依頼へてし
さうりくうらしけくあやもきさふ（細 ついて若）
べどまの物らみしきてしさすやかうず物ろろ（源詞也）
いはひぐるりの給はうしこうつしん。

まこ細とんかいあつしる
紫上をいやさたきのまず
きいで源氏の紫より同意
させかたえんとし

文へいうせあのべきすを
紫の其アマの方へまうりあ
女へさこうしられハわうりあ
ぬさんよ紫子よ言もつせさ
こさるすあうゆへ秋かうく此
おまぐそし源の此おまく
さうりてのまつし

文の一つひとつそへまゐらする
文のやうしなふへきよし[illegible]
なふ和文の心[illegible]
うひなり源と紫に[illegible]
まへとのまへ
あいさつなりとし
文の[illegible]よわりしたると
せなふに源氏なれば文よ
あいさつなりとおもふべき
なりし
まうも[illegible]しへを
兵部卿宮よし紫の文なれ
八源氏の筆も同し人をとのこ
まいひすもくし

細 末秋中[illegible]面白し
うつあさぢりしぞくえしてぞいふめるものの
よそいりこそへばやともえこそらしぞ忍ば
やまぐりすくね給ひつゝもとくづきし[illegible]
しぼよわがちもしきの[illegible]よおもし
ころとねもぞ[illegible]し[illegible]
つきつくひたしもいぞこすめへきの
はつひうそまりそろぞとのあふにあふ
ざりそうしあそれてはそろしと思ひそれば
あるらのふまうも[illegible]れじへそこそ[illegible]
ぶ[illegible]そいぞくあへばふあふせうあらん[illegible]
こ八つまとゆす後こてゆはつゆみもえま[illegible]
ねがゆ[illegible]つる[illegible]

うくる大輔丸不分明一說ずんば
かしこく
たよくまことの御返りなれば
兵部卿宮の文のこまかなるは
心えられもよし
またてきうしらうへなれば
今紫の上の御文にまたに
つまみもえまいてぬと兵部
[illegible]
うよしてせ[illegible]
[illegible]八二条院へ[illegible]
しまうあてそとく
そのつゝ[illegible]
[illegible]しまさい
ゆきを念ずも前世[illegible]
[illegible]兵部卿へ[illegible]
[illegible]源の[illegible]
ん今八紫も[illegible]
れぞんくも[illegible]思と
うしのちあも人も[illegible]
しー 孟 御[illegible]
まそもすりり日車あるく
しとく師 源氏少納言
詞八紫もいれあくなり

らうしといふうくるり[illegible]べうすれば
てきうしけゞさうんへまぜれど人[illegible]
れはうしとのさくへべいあそしてしくて
をふいひと[illegible]んまくわん給べき文のまくそ
世給うんよいらさ[illegible]よりこそてく[illegible]
づつう[illegible]へてさるべきよおりしまさばとも
うくも給りまんといとしひやりおすささ
[illegible]のこゝるよ給れば[illegible]んでくるす
うゆるべしとそこゆるとべうしのちふゆるを
へいまうりまんのしもそ御車よをこせ給
へたあさのしうかうさ御よりしもひあへうきま
かずつともやまて[illegible]していさゆふ少納言

[illegible]

紫の詠は八結ひたなり
しもまつれとて紫と車
まのせまかく
よんめりけれそともひさこ
おく　雨提　師　最よ物
めのひいしおむあまりひさう
なれんとゑし肩尾なり
其アマの方へ行羽さこ乃
さぬなしかさこさるてお
納言のりし　細　衣架おと
しかりさあてく　師　此段
あれハ衣裄より知られ
りてさし

お納言白絹いとまのかち
しかと　師となら二葉
沈まつるそ　も義ものを
出もてとてかりそひさ
それふあなり　細　それハ
[illegible]

とらめきてしんかさるけは二八よ人へぬひしけれども
もしかきさげくらりしくもまりあさ衣さう
へてのりぬ二葉飛ハらりなれバおごあらぬ程
よ物りておしばさぬよけてる阪よまをそやりあふかり
あいどへいとりうしくりよりきこいでうてそし
まよお納言何をいて夢のこうしそくる
と[illegible]まし何かへさこしるまりそやまうん
だにそはころあかり[illegible]
[illegible]

いまハさうばかりのこゝろ
あはしさうそ
こゝろすみひとく 孟母の 師いまハ
りそやさむらうまか納云ら
りてまハねあね若なら遠
我かぐの□□□ 夜
何殿の宮をかくぐとよむ
之家のらく乾舟の巻ニ
も我かぐの毛あてありて又
美の我かぐなれどもあらず
隠あすらぬ人などゝ其殿と
云ふつよぶ我かぐとあそうれ
その抽語よをも天ねの我かく
なしあり又は抽語ともあ
ね我かくなしあり
つしうるく我りひあへれと
師が納え也じらうの所
よ変らうんハこうしうすく
加合をとひあうれどこ
よハ女房も何ぞ男その
陰しうれいかなと安きし

が得ふ得んとのむふ忍いひとあうし、いまへさは
我かのごゝろまじさぞうるとぞしんへさうく
まへばいとまびしきをてなさまかしまつり。め
のとはらちもふくされどものも我かくしもでな
さおくらうおちゆくまいにくわさまくほ我し
どのつくりざ御志ろしうひざ御さうらみもハ
もん庵のまゑごもしきまとなるねさうん
やうまゑしてぞやくうらまうよつしるが
くせりもひおそれど。こゝろすまは女なるどさ
かくへきりまうくさまうらへとなじゃの
まつかりみしのうくさなり。まれバ抑もこど
もぞし陰のしるありまうくへむしうへ

若得ろけよハあらしと
孟母めむ
さの人よハあらしと
物くあらな
ゆうつけて
夕浴そなりきへよなり
てなり
女ハむやつくつみなりてそ
何海端厳如天台木蓮心柔ニ
輭華嚴經陽體剛強自在ニ
陰柔順従陽ニ
花源英明男女婚姻賦ニ云ク
至剛者男至柔者女 文粋
明星 非英明後江相公也 可設
之私 後漢列七十四 曹世叔
妻傳 陽ハ以剛為德陰ハ以柔
為用 男以強為貴 女以弱
為美 故ニ鄙諺ニ有リ云 生男如
狼猶恐其尫 生女如鼠猶恐
其武
今ようとしすくら語
若もちころのまゝにとて
みわしそくみゝやとお

里しうさく人ハされあらん我行ろけりの
わらしとさくめくはてう川ほゝ旧也
西の對之
としみくよまつつ目たり
なくてあしらめるとさうへくさくゆ
つけくこそハむろくさせ給へもとのあて
孟子の對之友達ぞ
めつよりくそへめしよつくるすちいさ
くきつしさうよまつれとありうれ
いとおうしまめく巳人まちらり
はぞよまとまれてつまゐると
こうてかくさろく
わらハおらん
なるひとえうちありなんや。女ハん
そくらるのなん。今よりそし

とかくしとかりなえるえうひ
あのあはれひやさしとも[illegible]
かなしへてんと思ひかへされ
煮も[illegible]あらしくまさ
てうえんとおもひとくらし
[illegible]かれし[illegible]れて[illegible]
よりも 紫の[illegible]て[illegible]
[illegible]しくうれても源の
[illegible]あかしまふでのよくらく
しきとく
やくしおきおてえ給ひ[illegible]
細花鳥説[illegible]
丁同也 衣やりしくおさおて
と給の祖八よそへつきよる[illegible]
あさひ抱とも[illegible]君の[illegible]
てん給へく[illegible]外祖
母の服いまご三ケ月の中な
れハ[illegible]のうちひせとき[illegible]
と[illegible]大色と服中[illegible]
なりもその[illegible]
かれもうての[illegible]
[illegible]
河 鈍色紫上 祖母の服と
いろと[illegible]しはハ[illegible] 祖母の服中なれとも[illegible]て[illegible]
叙令案純色之[illegible]外祖母服三ケ月[illegible]其上今の[illegible]
あ[illegible]例の[illegible]
のち[illegible]濃のき[illegible]のこさなり。但今 祖母の服[illegible]或ハ之
いろ[illegible]も多く[illegible]其[illegible]
四位五位[illegible]
[illegible]の[illegible]
て[illegible]
[illegible]五音[illegible]
之殿の[illegible]四位
の袖ハ[illegible]位ハ赤き之[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ
細[illegible]野よい
へ[illegible]れぬ[illegible]やさて[illegible]
ハ紫の枝へ 萩[illegible]の[illegible]
[illegible]

へ[illegible]給ひ[illegible]ちハさし[illegible]れてと[illegible]
も[illegible]なれ[illegible]
[illegible]ひて。[illegible] 孟 経をお給ふの[illegible]
ま[illegible]て[illegible] 紫の君三人へ[illegible]
く[illegible] 紫のさ[illegible]
山下[illegible]純色の[illegible]見[illegible]
ら給ま[illegible]のこ[illegible]
[illegible]給[illegible]
ど[illegible]
[illegible]れて[illegible] 細 源の[illegible]
紫上の[illegible] [illegible] 池のこころ[illegible]
河 [illegible]
どの[illegible]ハ[illegible]もかれの前栽[illegible]
[illegible]
孟 [illegible]
[illegible]
紫上の[illegible]
[illegible]屏風[illegible]
[illegible] 源氏[illegible]
[illegible]なれしや。[illegible]ハ二三日[illegible]
[illegible] 細 御[illegible]
[illegible]
[illegible]野[illegible]
へ[illegible]れぬ[illegible]

ねたみ給ふこと　紀なるのぬを
ゆかりしらくに見へり
紫平・嫉て詠して引
まくねいけるに西紀
若葉と人のゆかりをさんこ
とをしそ思ふ

ゆかねとむ所へ
孟まろくともくさまぬまり
いくらふかくん　細わしく見え
御事も波法してこそらく
むかしもあるへきれとく人の
理とさへくる御所為へし

つるをくつなるのひとへしのかをとりてこゝろ結　紫の
弁のくさが御事　ありをこらしちいさくて　源
細 薄の根と寝ることよせてかくいへり。まへに結ぼれたる事といふ　ぬいみねとわらわれとぞ思ひみむさしの露日
師 若き草葉のゆかりと思へるは表なることなし　細 源詞　紫もし　けわかの草のゆかりをとありつるくさを見
細 紫上の御こと　まへしあれんどやつかうハかくむごとそてこほげき　源の心
まとおかがかんまでうらすくいけてぞありけれバひら
博く思へそでよりしねびむげなりくぬことそをろ
されはらへこさらんかしとのまうまへバうちそバ　紫上えらかふ
海く　うそてかいまつかいふかくとりあつるさ海の　手
出さればすらもらうこそうのまゝ思がすればこて　源の心へ　師心をつくし
ろゐかしわやしとおぼさてうさそことあひ　源氏の心　紫詞と
源とらうらうしくしあのとおわそこまて

こゝ川つきゆかいと
孟紫の根とあらとこあて
まらかけり　細かくら川へき
ゆへもあまき方にむきしの
花しく見たを何ようくえ
今は何かまくらうけらえ
こと所ともらねとく何のゆかり
くらうもとも更に所ねなの
とくし
みくらかは　ゆくらくは太や
うなたの手かなるへし
二よきゆえきりの地むひ
花藤壺のゆかりゆかりと為
かくおむひあくさみあく
花よし人はもて色しと
師常り　花えし人あもかち
うかしくまくしてんとれ
わもとのかの青龍し
二条院へまうてし南も
と源もかくしまうひか納
えも口うさかし

紫　花川べきおかやしらねば地かけれいかゞ　師紫のゆかりのまいて結ばれずけしく
かくさのゆかりかくかんといをわりまれど
細紫八結たらんとえゆかし　おいさらくして　ふくよりよりひまうくにこあま　源くし
紫の日数あまりとくらり　ざみまそみくらりをりいまめしきとなかり　孟御世のへく
くぎしよううかいまひきんとうまふむのず
ひなの屋のとし　なぶまうくやとしてくうぞもくりろ花　源と紫もえ
よあそびつてこよあるこりの地りひのとのくさくく
細 紫より花のかく　わたりのとふりまふしんくえよりらりか　紫やてし
紫きく　てよざぬとてし給もりまよこてしやらんかさ
なくてうくしきびおへつまうかしらし人はし
源く　らせじとごあとのうひか細えもあふへことされ
源物かたし　紫の心の中かかんかしかさらし　かさりあさへ
いきらよくろげとめへやりつくうぐゆくく思ふとし

おいらはほさきさんをあん
ましてく
岩戸のはらさん業平をま
うしろんどよの[illegible]
ねどもおいらはいやさそと
なんし
ちまうせてみそしなつろ
し　孟　が細ゑら心まう
せおしていまうてまる
まうく

ゑしんだが細ゑがみつくりりしさうしかう
このさらくしみすうよこやもいふろひとみつ
おりて こ何まぐゑもうしこうはわてうわのれ
んこしでいとりのしと おもりうりしこゝく
なれバめのし いしくうしをぐうなうら世
のおさうがおいうらはほさきさんを訓んゑみし
あどいいくぞらはまうせくおそしなつう
うつうおありとおすくくりりはおの
さていぐくまそしまうこうがつげしらの従もま
づうりくし傷那の法評おもよろはこゝて
ゑさへどおとらわくておてつしうう

きてくのくくもまらくなつくとみくしと地よ
ひ中のしあを涙ちをらせてくわがくなりま
くせばべう地目しけるなりしこてひあう
もくらおしう地目しまうりやすしくへま
いりあり中うりぬれおそんびうくこさのまうしうべ
ちごとも いてせがしつうよいかあらしき涙わ
ワうなはともなれだ地目ふくしくゑすくさわと
ひおくう 人の地をくこさこの地をとれたまど
しそうしうぐくしまさタ景色たなどけうりぞわ
まゑざこしひえそくしまひそくどうらゆうことあど
しのへど文をばこしよ出ひいつくまこて絡
わゆぐすしまりこおりしひ中のし絡いぞしあう

うくのくくさもちくなどよ
らしとせし
細　業平の継母く　孟　継母の
業の母とこふくらしるく
ちらなほまうせろべう
業平を継母のやしなひて
うしてくへくせつてまう
もさらひまうて
人まうかうまりぬ
業の里乃ゑく業のくゝ
へまゐらて

我よりおほえられたる
源氏のよりかゝる哉
へとなり

ふるくさの
霜かれしたくちそひ
ゆふくれのくし
さりしらこてらわり
紀見よりハ姫のいまさ給ふ
またく源氏の君を恨ゞさ
そのやうみしまゝするを
そく 細 紫上のいまゝ給ふ
なきをそえ 所 是紫の
上ハ源のまきさりてありし
とおもひよる故をえへきゝ
しら心ハ嫉妬なるのうこ
をつくわが心ちとハ男の
わまいハ人もうらみうち
とハ女とりて
孟 何心をもなくさ人あれども
ましさりておそひりのと源
のなく
ひとめなしもちて
孟 ひとめなどハ神とろよ
されバ心を孟かろを見ハ
ましきりくあそひたりと
のなく
これハいと哀なりしこと
紫上地されなれハよのつねの夫婦のなかにひ思ふみそめしそむすめるなどのやう
なれども又まことのむすめみをおしそぞ思ひよる夫婦の中なりてハさ哀なりした
なりしる物と源氏か自ら思ふ也

細 源乙 孟 源の見識ありしも

かくれハ今ゆくこのみちうち地やいはいそ
うちろびまりうしかのし絵ぬ袖よりやけもれ
紫上 むすめいのくむちひそく哀よそいふくとしかひれ
源の主ハくさうへ業のし あはれ かとてろよいつりめてしいうさくうちとくも何か
かも源を他人の物さ人ことも思ひ
ならく しとをえひうとさらうをよはいつくしう
らうし後見さかりそらうし うかわりな
ましれとむ何りしさちうまたありぬれぬ
まうらちもちうしうちお命しも出くや 出家の事乃
とらとうれハもらくそうちらよ地りその
兵部卿宮をえく かわりともあつしら出るら終りハとなり
しきりくあるびたり、しもあやしきる
紫上の年齢かくハよく
くらりはからめれしくらうやさく
うちふつゆふひいへてなりさうてなさに物らふ
しなどいへらしもなおきなうふ給へられそ
いとさ哀ふるりさうしつきらきさありき
地がりこめり